

札幌青葉鍼灸柔整専門学校

柔道整復学科昼間部 シラバス

(実務経験のある教員による授業)

柔道整復学科・昼間1部・1年（柔道Ⅰ）

科目名	柔道Ⅰ	時間・単位	30時間・1単位・15コマ
担当教員	八重樫 正		
教員の実務経験	柔道整復師として病院・接骨院等で長年勤務した後、専任教員として従事する。		
教育目標	柔道整復師として柔道を正しく理解するため、柔道技術の構造、精神および体育的価値を中心に講義、実習する		
授業内容	長年柔道整復師として柔道に関わってきた経験を生かし、礼法、受身、基本動作、对人的技能、審判法、形などを扱う。授業は初心者でも十分に理解、体得できるような進度を前提にするが、内容によっては習熟度に応じたグループ別学習も取り入れることがある。		
成績評価	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業への出席が3分の2以上を満たした者についてのみ試験等を実施する。 ・ 期末試験は授業時間内（原則として授業の最終日）に実施する。 ・ 再試験は授業時間外に実施する。 ・ 必要に応じて授業時間内、あるいは授業時間外に中間試験を実施することがある。 ・ 成績評価にあたっては、①試験等の成績、②出席状況、③授業の受講態度等を総合的に勘案した結果を基に判定する。 ・ 成績は以下の5段階で評価し、「可」以上を合格とする。 「秀」：90～100点 「優」：80～89点 「良」：70～79点 「可」：60～69点 「不可」：59点以下 		

教科書	プリント配布	著者名	
		出版社名	
参考書		著者名	
		出版社名	

柔道整復学科・昼間1部・1年（柔道Ⅰ）

回	講義内容	備考
1	ガイダンス、柔道小史、礼法	
2	受身、出足払、膝車、支釣込足	
3	浮落	
4	背負投	
5	肩車	
6	浮腰	
7	払腰	
8	釣込腰	
9	送足払	
10	支釣込足	
11	内股	
12	投の形、打ち込み、投げ込み	
13	投の形、打ち込み、投げ込み	
14	総復習	
15	期末試験	

柔道整復学科・昼間1部・1年（基礎柔整学Ⅰ）

科目名	基礎柔整学Ⅰ	時間・単位	60時間・2単位・30コマ
担当教員	阿部 愛鈴紗		
教員の実務経験	柔道整復師として付属治療院に数年勤務した後、専任教員として従事する。		
教育目標	<p>柔道整復師を目指すものにとって柔道整復学は欠くことのできない分野であることはいうまでもない。特に基礎柔整は次に学ぶ各論に移る際、理解への足がかりになるものである。柔道整復術の歴史や定義、意義および社会的役割を理解し医療界に貢献できるような人格をもった人間形成を目指すことを目的とする。現在の医療界において柔道整復師が担っている社会的役割は多岐にわたるが、外傷の専門家としての位置づけから考えると整形外科分野と重複し、独自の理論が必要となってきた。そのため、業務範囲や今後の方向付けあるいは業務の正しい理解を促すため教科書を元にした講義を進める方針である。</p>		
授業内容	柔道整復師としての臨床経験を盛り込みながら、学生がイメージしやすいよう骨折損傷について講義をおこなう。		
成績評価	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業への出席が3分の2以上を満たした者についてのみ試験等を実施する。 ・ 期末試験は授業時間内（原則として授業の最終日）に実施する。 ・ 再試験は授業時間外に実施する。 ・ 必要に応じて授業時間内、あるいは授業時間外に中間試験を実施することがある。 ・ 成績評価にあたっては、①試験等の成績、②出席状況、③授業の受講態度等を総合的に勘案した結果を基に判定する。 ・ 成績は以下の5段階で評価し、「可」以上を合格とする。 「秀」：90～100点 「優」：80～89点 「良」：70～79点 「可」：60～69点 「不可」：59点以下 		

教科書	柔道整復学・理論編改訂版第7版	著者名	
		出版社名	南江堂
参考書		著者名	
		出版社名	

柔道整復学科・昼間1部・1年（基礎柔整学Ⅰ）

回	講義内容	備考
1	柔道整復術に必要な骨の分類	
2	柔道整復術に必要な骨の分類	
3	柔道整復術に必要な骨の分類	
4	柔道整復術に必要な骨の分類	
5	骨の損傷	
6	骨の損傷	
7	骨の損傷	
8	骨の損傷	
9	骨の損傷	
10	骨の損傷（症状）	
11	骨の損傷（症状）	
12	骨の損傷（症状）	
13	中間試験	
14	中間試験解説	
15	骨の損傷（合併症）	
16	骨の損傷（合併症）	
17	骨の損傷（小児老人の特徴・治癒過程）	
18	骨の損傷（小児老人の特徴・治癒過程）	
19	骨の損傷（小児老人の特徴・治癒過程）	
20	骨の損傷（予後）	
21	骨の損傷（予後）	
22	骨の損傷（予後）	
23	関節の損傷	
24	関節の損傷	
25	関節の損傷	
26	関節の損傷	
27	総合復習	
28	総合復習	
29	期末試験	
30	期末試験解説	

柔道整復学科・昼間1部・1年（基礎柔整学Ⅱ）

科目名	基礎柔整学Ⅱ	時間・単位	60時間・2単位・30コマ
担当教員	塚田 悟司		
教員の実務経験	柔道整復師として付属治療院に数年勤務した後、専任教員として従事する。		
教育目標	<p>柔道整復師を目指すものにとって柔道整復学は欠くことのできない分野であることはいうまでもない。特に基礎柔整は次に学ぶ各論に移る際、理解への足がかりになるものである。柔道整復術の歴史や定義、意義および社会的役割を理解し医療界に貢献できるような人格をもった人間形成を目指すことを目的とする。現在の医療界において柔道整復師が担っている社会的役割は多岐にわたるが、外傷の専門家としての位置づけから考えると整形外科分野と重複し、独自の理論が必要となってきた。そのため、業務範囲や今後の方向付けあるいは業務の正しい理解を促すため教科書を元にした講義を進める方針である。</p>		
授業内容	<p>柔道整復師の臨床経験を踏まえ 「柔道整復師養成施設指導要領」に基づき講義する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 各組織の損傷（関節、筋、腱、末梢神経） 2. 診察 3. 治療法 4. 外傷予防 		
成績評価	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業への出席が3分の2以上を満たした者についてのみ試験等を実施する。 ・ 期末試験は授業時間内（原則として授業の最終日）に実施する。 ・ 再試験は授業時間外に実施する。 ・ 必要に応じて授業時間内、あるいは授業時間外に中間試験を実施することがある。 ・ 成績評価にあたっては、①試験等の成績、②出席状況、③授業の受講態度等を総合的に勘案した結果を基に判定する。 ・ 成績は以下の5段階で評価し、「可」以上を合格とする。 「秀」：90～100点 「優」：80～89点 「良」：70～79点 「可」：60～69点 「不可」：59点以下 		

教科書	柔道整復学・理論編改訂版第7版	著者名	
		出版社名	南江堂
参考書		著者名	
		出版社名	

柔道整復学科・昼間1部・1年（基礎柔整学Ⅱ）

回	講義内容	備考
1	関節の解剖および構造	
2	関節の解剖および構造	
3	各組織の損傷（関節、筋、腱、末梢神経）	
4	各組織の損傷（関節、筋、腱、末梢神経）	
5	各組織の損傷（関節、筋、腱、末梢神経）	
6	各組織の損傷（関節、筋、腱、末梢神経）	
7	各組織の損傷（関節、筋、腱、末梢神経）	
8	各組織の損傷（関節、筋、腱、末梢神経）	
9	各組織の損傷（関節、筋、腱、末梢神経）	
10	各組織の損傷（関節、筋、腱、末梢神経）	
11	各組織の損傷（関節、筋、腱、末梢神経）	
12	各組織の損傷（関節、筋、腱、末梢神経）	
13	各組織の損傷（関節、筋、腱、末梢神経）	
14	各組織の損傷（関節、筋、腱、末梢神経）	
15	中間試験	
16	中間試験解説	
17	診察	
18	診察	
19	診察	
20	治療法	
21	治療法	
22	治療法	
23	治療法	
24	外傷予防	
25	外傷予防	
26	外傷予防	
27	総復習	
28	総復習	
29	期末試験	
30	期末試験解説	

柔道整復学科・昼間1部・1年（基礎柔整学Ⅲ）

科目名	基礎柔整学Ⅲ	時間・単位	60時間・2単位・30コマ
担当教員	長谷川・阿部		
教員の実務経験	柔道整復師として病院等に長年勤務した後、専任教員として従事する。		
教育目標	<p>柔道整復師を目指すものにとって柔道整復学は欠くことのできない分野であることはいうまでもない。特に基礎柔整は次に学ぶ各論に移る際、理解への足がかりになるものである。柔道整復術の歴史や定義、意義および社会的役割を理解し医療界に貢献できるような人格をもった人間形成を目指すことを目的とする。現在の医療界において柔道整復師が担っている社会的役割は多岐にわたるが、外傷の専門家としての位置づけから考えると整形外科分野と重複し、独自の理論が必要となってきた。そのため、業務範囲や今後の方向付けあるいは業務の正しい理解を促すため教科書を元にした講義を進める方針である。</p>		
授業内容	<p>柔道整復師としての臨床経験を盛り込みながら、学生がイメージしやすいよう骨折、捻挫、脱臼、軟部組織の損傷（筋・腱・神経・血管・リンパ管）について講義をおこなう。</p>		
成績評価	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業への出席が3分の2以上を満たした者についてのみ試験等を実施する。 ・ 期末試験は授業時間内（原則として授業の最終日）に実施する。 ・ 再試験は授業時間外に実施する。 ・ 必要に応じて授業時間内、あるいは授業時間外に中間試験を実施することがある。 ・ 成績評価にあたっては、①試験等の成績、②出席状況、③授業の受講態度等を総合的に勘案した結果を基に判定する。 ・ 成績は以下の5段階で評価し、「可」以上を合格とする。 「秀」：90～100点 「優」：80～89点 「良」：70～79点 「可」：60～69点 「不可」：59点以下 		

教科書	柔道整復学・理論編改訂版第7版	著者名	
		出版社名	南江堂
参考書		著者名	
		出版社名	

柔道整復学科・昼間1部・1年（基礎柔整学Ⅲ）

回	講義内容	備考
1	業務範囲と心得	
2	柔道整復術とは（概論）	
3	〃	
4	骨損傷の分類	
5	〃	
6	骨折の症状	
7	〃	
8	骨折の合併症	
9	〃	
10	小児骨折・高齢斜骨折の特徴	
11	〃	
12	骨折の癒合日数・治癒経過	
13	〃	
14	骨折の予後・治癒に影響を与える因子	
15	〃	
16	中間試験	
17	中間試験解説	
18	脱臼の分類	
19	〃	
20	脱臼の症状・合併症	
21	〃	
22	脱臼の整復障害・経過と予後	
23	〃	
24	各組織の損傷	
25	〃	
26	総復習	
27	総復習	
28	総復習	
29	期末試験	
30	期末試験解説	

柔道整復学科・昼間1部・1年（基礎柔整学Ⅳ）

科目名	基礎柔整学Ⅳ	時間・単位	60時間・2単位・30コマ
担当教員	松田 心一		
教員の実務経験	柔道整復師として接骨院等で長年勤務した後、専任教員として従事する。		
教育目標	上肢・下肢の解剖学的特徴および骨や筋の位置関係を学び、そのうえで骨折の発生機序や転位、症状、合併症などについての学習を目的とする。		
授業内容	接骨院の臨床経験を活かした視点で、患者との接し方、骨折に対する知識および対応についてを学ばせる。		
成績評価	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業への出席が3分の2以上を満たした者についてのみ試験等を実施する。 ・ 期末試験は授業時間内（原則として授業の最終日）に実施する。 ・ 再試験は授業時間外に実施する。 ・ 必要に応じて授業時間内、あるいは授業時間外に中間試験を実施することがある。 ・ 成績評価にあたっては、①試験等の成績、②出席状況、③授業の受講態度等を総合的に勘案した結果を基に判定する。 ・ 成績は以下の5段階で評価し、「可」以上を合格とする。 「秀」：90～100点 「優」：80～89点 「良」：70～79点 「可」：60～69点 「不可」：59点以下 		

教科書	柔道整復学・理論編改訂版第7版	著者名	
		出版社名	南江堂
参考書		著者名	
		出版社名	

柔道整復学科・昼間1部・1年（基礎柔整学Ⅳ）

回	講義内容	備考
1	機能解剖	必要に応じ 試験 日程を変更
2		
3	鎖骨骨折	
4		
5	機能解剖	
6		
7	上腕骨外科頸骨折	
8		
9	機能解剖	
10	上腕骨骨幹部骨折	
11		
12	復習問題演習	
13	復習問題解説	
14	中間試験	
15	中間解説	
16	機能解剖	
17		
18	前腕骨遠位端部骨折	
19		
20	機能解剖	
21		
22	中手骨骨折	
23		
24	機能解剖	
25	下腿骨骨幹部骨折	
26		
27	復習問題演習	
28	復習問題解説	
29	期末試験	
30	期末解説	

柔道整復学科・昼間1部・1年（基礎柔整学Ⅴ）

科目名	基礎柔道整復学Ⅴ	時間・単位	2単位・60時間（30コマ）
担当教員	小倉・武藤		
教員の実務経験	柔道整復師として接骨院等で長年勤務した後、専任教員として従事する。		
教育目標	柔道整復術は、輝かしい伝統を基礎とし、近代医学の発展に貢献してきた。その中での柔道整復学は柔道整復師を目指すものにとっては欠かすことのできないものである。基礎柔道整復学として、柔道整復師が実際に触れる外傷を理論的に学び、柔道整復術の意義、社会的役割を理解し、医療に携わるものとして社会からの信頼と尊敬を得るような人間性の向上と、高度の医学的知識の修得を促すため、教科書を中心に講義を進める方針である。		
授業内容	<p>全国柔道整復学校協会監修「柔道整復学・理論編」を教科書とし、身体各部位の損傷各論について、講義を中心に授業を行う。部位については、1. 肩関節、2. 肘関節、3. 股関節、4. 膝関節とし、損傷については、1. 脱臼、2. 軟部組織損傷とする。</p> <p>各部位において、解剖と機能をよく理解した上で、各損傷の発生と所見を学習する。</p> <p>とくに、担当教員の臨床経験から、臨床所見や類症との鑑別に重点をおき授業を行う。</p>		
成績評価	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業への出席が3分の2以上を満たした者についてのみ試験等を実施する。 ・ 期末試験は授業時間内（原則として授業の最終日）に実施する。 ・ 再試験は授業時間外に実施する。 ・ 必要に応じて授業時間内、あるいは授業時間外に中間試験を実施することがある。 ・ 成績評価にあたっては、①試験等の成績、②出席状況、③授業の受講態度等を総合的に勘案した結果を基に判定する。 ・ 成績は以下の5段階で評価し、「可」以上を合格とする。 「秀」：90～100点 「優」：80～89点 「良」：70～79点 「可」：60～69点 「不可」：59点以下 		

教科書	柔道整復学・理論編改訂版第7版	著者名	
		出版社名	南江堂
参考書		著者名	
		出版社名	

柔道整復学科・昼間1部・1年（基礎柔整学Ⅴ）

回	講義内容	備考
1	鎖骨部の損傷・機能と解剖	
2	胸鎖関節脱臼・肩鎖関節脱臼	
3	肩関節部の損傷・機能と解剖	
4	肩関節脱臼	
5	〃	
6	反復性肩関節脱臼	
7	肩関節部の軟部組織損傷	
8	〃	
9	肘関節の部の損傷・機能と解剖	
10	肘関節脱臼	
11	〃	
12	肘内障	
13	復習（問題演習と解説）	
14	〃	
15	中間試験	
16	大腿部の損傷・解剖と機能	
17	大腿部の軟部組織損傷	
18	〃	
19	膝関節の損傷・解剖と機能	
20	膝関節部の軟部組織損傷	
21	〃	
22	下腿部の損傷・解剖と機能	
23	下腿部の軟部組織損傷	
24	〃	
25	足関節部の損傷・解剖と機能	
26	足関節部の軟部組織損傷	
27	〃	
28	復習（問題演習と解説）	
29	〃	
30	期末試験	

柔道整復学科・昼間1部・1年（基礎実技 I）

科目名	基礎実技 I	時間・単位	45時間・1単位・22.5コマ
担当教員	工藤・杉浦		
教員の実務経験	柔道整復師として接骨院等で長年勤務した後、専任教員として従事する。		
教育目標	柔道整復学を学ぶ上で骨折などの整復位をいかに保持するかが重要である。患部を毎日観察し腫脹の状態によって調節し、緩まず確実に合理的な包帯を巻き、患部を安静に保つことが要求される。ギプスと異なる独特の技術に基づく「柔道整復師の包帯法」を臨床に基づいた技術の習得を目的とする。		
授業内容	接骨院の臨床経験を活かした視点で、包帯を巻くコツや巻く時の注意事項についてなどをアドバイスしながら、包帯の基本的な扱い方から、固定の方法や種類についてを習得させる。		
成績評価	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業への出席が3分の2以上を満たした者についてのみ試験等を実施する。 ・ 期末試験は授業時間内（原則として授業の最終日）に実施する。 ・ 再試験は授業時間外に実施する。 ・ 必要に応じて授業時間内、あるいは授業時間外に小テストや中間試験を実施することがある。 ・ 成績評価にあたっては、①試験等の成績、②出席状況、③授業の受講態度等を総合的に勘案した結果を基に判定する。 ・ 成績は以下の5段階で評価し、「可」以上を合格とする。 「秀」：90～100点 「優」：80～89点 「良」：70～79点 「可」：60～69点 「不可」：59点以下 		

教科書	著者名	
	出版社名	
参考書	著者名	
	出版社名	

柔道整復学科・昼間1部・1年（基礎実技Ⅰ）

回	講義内容	備考
1	ガイダンス、包帯の巻き方、持ち方、環行	4裂包帯
2	包帯固定の目的、範囲、肢位、巻き直し	4裂包帯
3	環行帯、螺旋帯、蛇行帯、2帯目へのつなぎ、包帯巻き器	4裂包帯
4	復習	
5	亀甲帯（肘）	4裂包帯
6	亀甲帯（膝）	4裂包帯
7	折転帯（前腕）	5裂包帯
8	折転帯（下腿）	4裂包帯
9	上行麦穂帯、下行麦穂帯（肩）	3裂包帯
10	試験練習	
11	中間試験	
12	手関節（麦穂）～（折転含）～肘関節（亀甲帯）	5裂包帯
13	足関節（麦穂）～（折転含）～膝関節（亀甲帯）	4裂包帯
14	足関節（三角帯）	4裂包帯
15	母指MP関節	6裂包帯
16	復習	
17	復習	
18	前腕～肘（亀甲帯）～上腕上部：橋渡し	4裂包帯
19	4指・5指	6裂包帯
20	試験練習	
21	試験練習	
22	期末試験	
22.5	復習	

柔道整復学科・昼間1部・1年（基礎実技Ⅱ）

科目名	基礎実技Ⅱ	時間・単位	45時間・1単位・22.5コマ
担当教員	長谷川・小倉		
教員の実務経験	柔道整復師として接骨院等で長年勤務した後、専任教員として従事する。		
教育目標	<p>柔道整復学を学ぶ上で骨折などの整復位をいかに保持するかが重要である。身体の役割を担う筋肉や骨・関節の名称・特徴・働きを理解し、身体の動きにどのように連動するかを学ぶ機能解剖を元にギプスと異なる独特の技術に基づく「柔道整復師の包帯法」を臨床に基づいた技術の習得を目的とする。</p> <p>近年、柔道整復師に求められる知識・技能のひとつとして「競技者の外傷予防技術」があげられ、治療や応急・救急処置のみならず、傷害予防や関節の補強・矯正にテーピングが使用される場面が非常に多くみられるようになってきている。テーピングの基本として、必要とされる正しい解剖学的知識、各部位に応じたのテープの選定、実施の注意点を学び、そののちの実践的なものへとつなげてゆく。</p>		
授業内容	<p>以下の項目について実技演習する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 包帯の使い方（部位別包帯法） 2. 冠名包帯法 3. テーピングの概要 4. 基本テーピング法 5. 部位別テーピング法 		
成績評価	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業への出席が3分の2以上を満たした者についてのみ試験等を実施する。 ・ 期末試験は授業時間内（原則として授業の最終日）に実施する。 ・ 再試験は授業時間外に実施する。 ・ 必要に応じて授業時間内、あるいは授業時間外に中間試験を実施することがある。 ・ 成績評価にあたっては、①試験等の成績、②出席状況、③授業の受講態度等を総合的に勘案した結果を基に判定する。 ・ 成績は以下の5段階で評価し、「可」以上を合格とする。 「秀」：90～100点 「優」：80～89点 「良」：70～79点 「可」：60～69点 「不可」：59点以下 		

教科書	著者名	
	出版社名	
参考書	著者名	
	出版社名	

柔道整復学科・昼間1部・1年（基礎実技Ⅱ）

回	講義内容	備考
1	テーピングの目的	
2	足関節のテーピング(アンダーラップ)	
3	足関節のテーピング(スターアップ・ホースシュー)	
4	足関節のテーピング(スターアップ・ホースシュー)	
5	足関節のテーピング(オープンバスケットウィーヴ)	
6	足関節のテーピング(フィギュアエイト・ヒールロック)	
7	足関節のテーピング(フィギュアエイト・ヒールロック)	
8	膝関節のテーピング (MCL・LCL)	
9	膝関節のテーピング (MCL・LCL)	
10	復習	
11	中間試験	
12	中間試験	
13	基本包帯法	
14	//	
15	部位別包帯法 頭部、顔面	
16	冠名包帯法 デゾー包帯	
17	//	
18	ウェルボー包帯・ジュール包帯	
19	冠名復習	
20	冠名復習	
21	期末試験	
22	期末試験	
22.5	軟性材料固定の総括	

柔道整復学科・昼間1部・1年（基礎実技Ⅲ）

科目名	基礎実技Ⅲ	時間・単位	45時間・1単位・22.5コマ
担当教員	杉浦 透		
教員の実務経験	柔道整復師として接骨院等で長年勤務した後、専任教員として従事する。		
教育目標	<p>柔道整復学を学ぶ上で骨折などの整復位をいかに保持するかが重要である。患部を毎日観察し腫脹の状態によって調節し、緩まず確実に合理的な包帯を巻</p> <p>き、患部を安静に保つことが要求される。ギプスと異なる独特の技術に基づく「柔道整復師の包帯法」を臨床に基づいた技術の習得を目的とする。また講義は実技を主体とし副子、ギプス、などの硬性材料も取り入れ、より臨床に即した講義とする方針である。</p>		
授業内容	<p>担当教員が柔道整復の現場経験を活かした視点でアドバイスをしながら、実践的な知識および技術を習得していく。</p> <p>以下の項目について実技演習する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 固定材料の作製と固定例 2. 厚紙副子固定 3. クラメル固定 4. アルミ副子固定 5. 吸水ギプス固定 6. その他の硬性材料による固定 		
成績評価	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業への出席が3分の2以上を満たした者についてのみ試験等を実施する。 ・ 期末試験は授業時間内（原則として授業の最終日）に実施する。 ・ 再試験は授業時間外に実施する。 ・ 必要に応じて授業時間内、あるいは授業時間外に中間試験を実施することがある。 ・ 成績評価にあたっては、①試験等の成績、②出席状況、③授業の受講態度等を総合的に勘案した結果を基に判定する。 ・ 成績は以下の5段階で評価し、「可」以上を合格とする。 「秀」：90～100点 「優」：80～89点 「良」：70～79点 「可」：60～69点 「不可」：59点以下 		

教科書	著者名	
	出版社名	
参考書	著者名	
	出版社名	

柔道整復学科・昼間1部・1年（基礎実技Ⅲ）

回	講義内容	備考
1	ガイダンス 肩関節脱臼(厚紙)	
2	肩関節脱臼(厚紙)	
3	クラーメル副子(肘関節)	
4	クラーメル副子(肘関節)	
5	アルフェンス(環指・小指)	
6	アルフェンス(環指・小指)	
7	中間試験①	
8	クラーメル副子(下肢)	
9	クラーメル副子(下肢)	
10	プライトン(サムスプリント)	
11	プライトン(サムスプリント)	
12	U字シーネ(足関節)	
13	U字シーネ(足関節)	
14	肋骨骨折厚紙	
15	肋骨骨折厚紙	
16	中間試験②	
17	下肢(トゥカバーブレース)	
18	下肢(トゥカバーブレース)	
19	上肢バタフライスプリント	
20	上肢キャスト(ミュンスターギプス)	
21	上肢キャスト(ミュンスターギプス)	
22	上肢キャスト(ミュンスターギプス)	
22.5	期末試験	

柔道整復学科・昼間1部・1年（基礎実技Ⅳ）

科目名	基礎実技Ⅳ	時間・単位	45時間・1単位・22.5コマ
担当教員	松田 心一		
教員の実務経験	柔道整復師として接骨院等で長年勤務した後、専任教員として従事する。		
教育目標	<p>元来、柔道整復術における固定法は整復法、後療法とともに、治療の根幹をなすものであり、その固定法に用いられる材料として絆創膏固定、いわゆるテーピングは重要なものであった。近年、柔道整復師に求められる知識・技能のひとつとして「競技者の外傷予防技術」があげられ、治療や応急・救急処置のみならず、傷害予防や関節の補強・矯正にテーピングが使用される場面が非常に多くみられるようになってきている。テーピングの基本として、必要とされる正しい解剖学的知識、各部位に応じてのテープの選定、実施の注意点を学び、そののちの実践的なものへとつなげてゆく。</p>		
授業内容	<p>接骨院での臨床経験を生かした患者を診るうえでの解剖学的知識、診察のチェックポイントを教え、患者を治療するための手技療法や運動療法の習得を目指す。</p>		
成績評価	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業への出席が3分の2以上を満たした者についてのみ試験等を実施する。 ・ 期末試験は授業時間内（原則として授業の最終日）に実施する。 ・ 再試験は授業時間外に実施する。 ・ 必要に応じて授業時間内、あるいは授業時間外に中間試験を実施することがある。 ・ 成績評価にあたっては、①試験等の成績、②出席状況、③授業の受講態度等を総合的に勘案した結果を基に判定する。 ・ 成績は以下の5段階で評価し、「可」以上を合格とする。 「秀」：90～100点 「優」：80～89点 「良」：70～79点 「可」：60～69点 「不可」：59点以下 		

教科書	プリント配布	著者名	
		出版社名	
参考書		著者名	
		出版社名	

柔道整復学科・昼間1部・1年（基礎実技Ⅳ）

回	講義内容	備考
1	上肢の解剖学的構造	
2	〃	
3	手技療法および運動療法	
4	〃	
5	上肢の診察チェックポイント	
6	〃	
7	手技療法および運動療法	
8	〃	
9	上肢の触診法、検査法、固定法	
10	〃	
11	手技療法および運動療法	
12	〃	
13	下肢の解剖学的構造	
14	〃	
15	下肢の診察チェックポイント	
16	〃	
17	総合復習	
18	〃	
19	〃	
20	実技試験	
21	実技試験	
22	実技試験	
23	実技試験	

柔道整復学科・昼間1部・1年（基礎柔道整復実技Ⅰ）

科目名	基礎柔道整復実技Ⅰ	時間・単位	45時間・1単位・22.5コマ
担当教員	松田 心一		
教員の実務経験	柔道整復師として接骨院等で長年勤務した後、専任教員として従事する。		
教育目標	<p>柔道整復術では、古くから運動器すなわち骨、関節、筋、靭帯、神経の損傷に対する施術を行ってきたが、スポーツ人口の増加や高齢者人口の増加に伴って、その施術対象も増加し、柔道整復師として習得すべき技術も高度化してきた。</p> <p>運動器疾患の正確で能率的な診断の基礎は、視診、問診に始まり理学的徒手検査法にある。柔道整復術の徒手検査法の習得は初期研修として意味深いものである。</p> <p>ここでは、身体各部位の診察のチェックポイント、触診法、各種テスト法とテーピングによる固定法を学習する。</p>		
授業内容	接骨院での臨床経験を生かした患者を診るうえでの解剖学的知識、診察のチェックポイントを教え、患者を治療するための手技療法や運動療法の習得を目指す。		
成績評価	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業への出席が3分の2以上を満たした者についてのみ試験等を実施する。 ・ 期末試験は授業時間内（原則として授業の最終日）に実施する。 ・ 再試験は授業時間外に実施する。 ・ 必要に応じて授業時間内、あるいは授業時間外に中間試験を実施することがある。 ・ 成績評価にあたっては、①試験等の成績、②出席状況、③授業の受講態度等を総合的に勘案した結果を基に判定する。 ・ 成績は以下の5段階で評価し、「可」以上を合格とする。 「秀」：90～100点 「優」：80～89点 「良」：70～79点 「可」：60～69点 「不可」：59点以下 		

教科書	プリント配布	著者名	
		出版社名	
参考書		著者名	
		出版社名	

柔道整復学科・昼間1部・1年（基礎柔道整復実技Ⅰ）

回	講義内容	備考
1	頭部・顔面の骨折（機能解剖含む）	必要に応じ試験日程を変更
2	頭部・顔面の骨折	
3	頭部・顔面の骨折	
4	顎関節脱臼（機能解剖含む）	
5	顎関節脱臼	
6	顎関節障	
7	胸部の骨折（胸骨・肋骨、機能解剖含む）	
8	胸部の骨折（胸骨・肋骨）	
9	胸部の骨折（胸骨・肋骨）	
10	復習問題	
11	復習問題解説	
12	中間試験	
13	中間試験解説	
14	脊椎の骨折（機能解剖含む）	
15	脊椎の骨折	
16	脊椎の脱臼	
17	頸部の疾患	
18	頸部の疾患	
19	腰部の疾患	
20	復習問題演習	
21	復習問題解説	
22	期末試験	
22.5	期末解説	

柔道整復学科・昼間1部・1年（基礎柔道整復実技Ⅱ）

科目名	基礎柔道整復実技Ⅱ	時間・単位	45時間・1単位・22.5コマ
担当教員	小倉 秀樹・武藤 耕太		
教員の実務経験	柔道整復師として接骨院等で長年勤務した後、専任教員として従事する。		
教育目標	<p>柔道整復術では、古くから運動器すなわち骨、関節、筋、靭帯、神経の損傷に対する施術を行ってきたが、スポーツ人口の増加や高齢者人口の増加に伴って、その施術対象も増加し、柔道整復師として習得すべき技術も高度化してきた。</p> <p>運動器疾患の正確で能率的な診断の基礎は、視診、問診に始まり理学的徒手検査法にある。柔道整復術の徒手検査法の習得は初期研修として意味深いものである。</p> <p>ここでは、身体各部位の計測法、手技療法、運動療法、および高齢者に対する機能訓練等についてを学習する。</p>		
授業内容	<p>以下の項目について、担当教員の臨床経験を活かし実践的に指導する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 身体計測の概要 2. 上肢の計測法 3. 下肢の計測法 4. 関節可動域の測定法 5. 手技療法 6. 運動療法 7. 高齢者の機能訓練法 8. 柔道実技 		
成績評価	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業への出席が3分の2以上を満たした者についてのみ試験等を実施する。 ・ 期末試験は授業時間内（原則として授業の最終日）に実施する。 ・ 再試験は授業時間外に実施する。 ・ 必要に応じて授業時間内、あるいは授業時間外に中間試験を実施することがある。 ・ 成績評価にあたっては、①試験等の成績、②出席状況、③授業の受講態度等を総合的に勘案した結果を基に判定する。 ・ 成績は以下の5段階で評価し、「可」以上を合格とする。 「秀」：90～100点 「優」：80～89点 「良」：70～79点 「可」：60～69点 「不可」：59点以下 		

教科書	柔道整復学・理論編改訂第7版	著者名	(公社)全国柔道整復学校協会
		出版社名	南江堂
参考書	柔道整復師と機能訓練指導	著者名	(公社)全国柔道整復学校協会
		出版社名	南江堂

柔道整復学科・昼間1部・1年（基礎柔道整復実技Ⅱ）

回	講義内容	備考
1	柔道実技	
2	〃	
3	〃	
4	〃	
5	〃	
6	身体計測の概要	
7	上肢長・周径の計測法	
8	下肢長・周径の計測法	
9	関節可動域 (ROM) の測定法：上肢	
10	〃	
11	関節可動域 (ROM) の測定法：下肢	
12	〃	
13	復習	
14	中間試験	
15	手技療法の基本	
16	手技療法の応用	
17	運動療法について	
18	手技療法と運動療法の応用	
19	〃	
20	高齢者の機能訓練	
21	〃	
22	期末試験	
22.5	総括・復習	

柔道整復学科・昼間1部・2年（柔道Ⅱ）

科目名	柔道Ⅱ	時間・単位	30時間・1単位・15コマ
担当教員	八重樫 正		
教員の実務経験	柔道整復師として接骨院等で長年勤務した後、専任教員として従事する。		
教育目標	柔道整復師として柔道を正しく理解するため、柔道技術の構造、精神および体育的価値を中心に講義、実習する		
授業内容	長年柔道整復師として柔道に関わってきた経験を生かし、礼法、受身、基本動作、对人的技能、審判法、形などを扱う。授業は初心者でも十分に理解、体得できるような進度を前提にするが、内容によっては習熟度に応じたグループ別学習も取り入れることがある。		
成績評価	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業への出席が3分の2以上を満たした者についてのみ試験等を実施する。 ・ 期末試験は授業時間内（原則として授業の最終日）に実施する。 ・ 再試験は授業時間外に実施する。 ・ 必要に応じて授業時間内、あるいは授業時間外に中間試験を実施することがある。 ・ 成績評価にあたっては、①試験等の成績、②出席状況、③授業の受講態度等を総合的に勘案した結果を基に判定する。 ・ 成績は以下の5段階で評価し、「可」以上を合格とする。 「秀」：90～100点 「優」：80～89点 「良」：70～79点 「可」：60～69点 「不可」：59点以下 		

教科書	プリント配布	著者名	
		出版社名	
参考書		著者名	
		出版社名	

柔道整復学科・昼間1部・2年（柔道Ⅱ）

回	講義内容	備考
1	ガイダンス、柔道小史、礼法、受身	
2	浮落、背負投	
3	肩車、浮腰	
4	払腰、釣込腰	
5	送足払、支釣込足	
6	内股	
7	投の形、打ち込み、投げ込み	
8	投の形、打ち込み、投げ込み	
9	投の形、打ち込み、投げ込み	
10	投の形、打ち込み、投げ込み	
11	投の形、打ち込み、投げ込み、乱取り	
12	投の形、打ち込み、投げ込み、乱取り	
13	投の形、打ち込み、投げ込み、乱取り	
14	総復習	
15	期末試験	

柔道整復学科・昼間1部・2年（臨床柔整学Ⅰ）

科目名	臨床柔整学Ⅰ	時間・単位	60時間・2単位・30コマ
担当教員	片倉 弘隆		
教員の実務経験	柔道整復師として接骨院等で長年勤務した後、専任教員として従事する。		
教育目標	<p>柔道整復術は、輝かしい伝統を基礎とし、近代医学の発展に貢献してきた。その中での柔道整復学は柔道整復師を目指すものにとっては欠かすことのできないものである。1学年で学んだ基礎柔道整復学を基盤として、柔道整復師が実際に触れる外傷を理論的に学び、柔道整復術の意義、社会的役割を理解し、医療に携わるものとして社会からの信頼と尊敬を得るような人間性の向上と、高度の医学的知識の修得が必須である。そのため業務として扱う外傷を鑑別するうえでも臨床医学および解剖生理学の基礎を理解をするため、教科書を中心に講義を進める方針である。</p>		
授業内容	<p>柔道整復師としての臨床経験を織り交ぜながら以下についての講義をおこなう</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 人体の構造と機能 2. 問題演習 		
成績評価	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業への出席が3分の2以上を満たした者についてのみ試験等を実施する。 ・ 期末試験は授業時間内（原則として授業の最終日）に実施する。 ・ 再試験は授業時間外に実施する。 ・ 必要に応じて授業時間内、あるいは授業時間外に中間試験を実施することがある。 ・ 成績評価にあたっては、①試験等の成績、②出席状況、③授業の受講態度等を総合的に勘案した結果を基に判定する。 ・ 成績は以下の5段階で評価し、「可」以上を合格とする。 「秀」：90～100点 「優」：80～89点 「良」：70～79点 「可」：60～69点 「不可」：59点以下 		

教科書	著者名	
	出版社名	
参考書	著者名	
	出版社名	

柔道整復学科・昼間1部・2年（臨床柔整学Ⅰ）

回	講義内容	備考
1	オリエンテーション・細胞・生理学の基礎	
2	細胞・生理学の基礎	
3	骨	
4	骨	
5	骨とカルシウム	
6	骨とカルシウム	
7	筋	
8	筋	
9	筋	
10	筋の生理学	
11	筋の生理学	
12	中間試験	
13	内分泌	
14	内分泌	
15	内分泌の生理学	
16	内分泌の生理学	
17	内分泌の生理学	
18	神経	
19	神経	
20	神経	
21	神経の生理学	
22	神経の生理学	
23	神経の生理学	
24	感覚	
25	感覚	
26	感覚の生理	
27	高齢者の生理学的特徴・変化	
28	発育と発達および競技者の生理学的特徴・変化	
29	体表解剖	
30	期末試験	

柔道整復学科・昼間1部・2年（臨床柔整学Ⅱ）

科目名	臨床柔整学Ⅱ	時間・単位	60時間・2単位・30コマ
担当教員	八重樫 正		
教員の実務経験	柔道整復師として接骨院等で長年勤務した後、専任教員として従事する。		
教育目標	柔道整復学は柔道整復師を目指すものにとっては欠かすことのできないものである。柔道整復師が実際に触れる外傷を理論的に学び、柔道整復術の意義、社会的役割を理解し、医療に携わるものとして社会からの信頼と尊敬を得るような人間性の向上と、高度の医学的知識の修得が出来るよう指導する。		
授業内容	柔道整復師としての現場経験を活かした視点で、実践的な知識と国家試験にも対応できる以下の教育を実施する。 1. 柔道整復理論（総論） 2. 柔道整復理論（上肢各論） 3. 柔道整復理論（下肢各論）		
成績評価	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業への出席が3分の2以上を満たした者についてのみ試験等を実施する。 ・ 期末試験は授業時間内（原則として授業の最終日）に実施する。 ・ 再試験は授業時間外に実施する。 ・ 必要に応じて授業時間内、あるいは授業時間外に中間試験を実施することがある。 ・ 成績評価にあたっては、①試験等の成績、②出席状況、③授業の受講態度等を総合的に勘案した結果を基に判定する。 ・ 成績は以下の5段階で評価し、「可」以上を合格とする。 「秀」：90～100点 「優」：80～89点 「良」：70～79点 「可」：60～69点 「不可」：59点以下 		

教科書	柔道整復学（理論編）	著者名	全国柔道整復学校協会
		出版社名	南江堂
参考書	柔道整復学（実技編）	著者名	全国柔道整復学校協会
		出版社名	南江堂

柔道整復学科・昼間1部・2年（臨床柔整学Ⅱ）

回	講義内容	備考
1	ガイダンス、骨の損傷①	
2	骨の損傷②	
3	骨の損傷③	
4	関節の損傷①	
5	関節の損傷②	
6	筋・腱・末梢神経の損傷①	
7	筋・腱・末梢神経の損傷②	
8	診察	
9	治療法①	
10	治療法②	
11	外傷予防	
12	復習	
13	中間試験	1～11の範囲
14	鎖骨部の損傷	
15	肩部の損傷	
16	上肢の末梢神経障害	
17	上腕部の損傷	
18	肘関節部の損傷	
19	前腕部の損傷	
20	手部の損傷	
21	骨盤部の損傷	
22	股関節部の損傷	
23	大腿部の損傷	
24	膝関節部の損傷	
25	下腿部の損傷	
26	足関節部の損傷	
27	足・足趾の損傷	
28	総復習	
29	期末試験	全範囲
30	試験解説	
備考 授業内で小テストを行うことがある。		

柔道整復学科・昼間1部・2年（臨床柔整学Ⅲ）

科目名	臨床柔整学Ⅲ	時間・単位	60時間・2単位・30コマ
担当教員	武藤 耕太		
教員の実務経験	柔道整復師として接骨院等で長年勤務した後、専任教員として従事する。		
教育目標	<p>柔道整復術は、輝かしい伝統を基礎とし、近代医学の発展に貢献してきた。その中での柔道整復学は柔道整復師を目指すものにとっては欠かすことのできないものである。1学年で学んだ基礎柔道整復学を基盤として、柔道整復師が実際に触れる外傷を理論的に学び、柔道整復術の意義、社会的役割を理解し、医療に携わるものとして社会からの信頼と尊敬を得るような人間性の向上と、高度の医学的知識の修得が必須である。そのため業務として扱う外傷についての理論を植付け、柔道整復学の正しい理解を促すため、教科書を中心に講義を進める方針である。</p>		
授業内容	<p>接骨院で実際に診てきた経験を講義におりませながら、実際の外傷をイメージしやすいよう、以下についておこなう。 「柔道整復師施設指導要領」に基づき講義する。 1. 各外傷の概説（原因・分類・症状・鑑別診断等） 2. 問題演習</p>		
成績評価	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業への出席が3分の2以上を満たした者についてのみ試験等を実施する。 ・ 期末試験は授業時間内（原則として授業の最終日）に実施する。 ・ 再試験は授業時間外に実施する。 ・ 必要に応じて授業時間内、あるいは授業時間外に中間試験を実施することがある。 ・ 成績評価にあたっては、①試験等の成績、②出席状況、③授業の受講態度等を総合的に勘案した結果を基に判定する。 ・ 成績は以下の5段階で評価し、「可」以上を合格とする。 「秀」：90～100点 「優」：80～89点 「良」：70～79点 「可」：60～69点 「不可」：59点以下 		

教科書	柔道整復学（理論編）	著者名	（社）全国柔道整復学校協会
		出版社名	南江堂
参考書		著者名	
		出版社名	

柔道整復学科・昼間1部・2年（臨床柔整学Ⅲ）

回	講義内容	備考
1	骨盤部の損傷	
2	骨盤部の損傷	
3	骨盤部の損傷	
4	大腿部の損傷	
5	大腿部の損傷	
6	大腿部の損傷	
7	大腿部の損傷	
8	膝関節部の損傷	
9	膝関節部の損傷	
10	膝関節部の損傷	
11	膝関節部の損傷	
12	膝関節部の損傷	
13	膝関節部の損傷	
14	中間試験	
15	下腿部の損傷	
16	下腿部の損傷	
17	下腿部の損傷	
18	下腿部の損傷	
19	下腿部の損傷	
20	下腿部の損傷	
21	下腿部の損傷	
22	下腿部の損傷	
23	足関節部の損傷	
24	足関節部の損傷	
25	足関節部の損傷	
26	足関節部の損傷	
27	足・趾部の損傷	
28	足・趾部の損傷	
29	足・趾部の損傷	
30	期末試験	

柔道整復学科・昼間1部・2年（臨床柔整学Ⅳ）

科目名	臨床柔整Ⅳ	時間・単位	60時間・2単位・30コマ
担当教員	工藤 久美子		
教員の実務経験	柔道整復師として接骨院等で長年勤務した後、専任教員として従事する。		
教育目標	柔道整復学および柔道整復術を学ぶことは、柔道整復師を目指すものにとり欠かすことのできない分野である。基礎柔道整復学をもとに、柔道整復師が扱う外傷を実技を通して学び、柔道整復術の意義、社会的役割を認識し、医療人として患者からの信頼と尊敬を得るような人間性の向上を図ると同時に、高度の医学的知識の修得が必須である。そのため、実技を通してさらに実践的な柔道整復学の正しい理解を促すため、教科書を中心として講義を進めていく方針である。		
授業内容	接骨院での経験を講義の中に生かした形で以下の内容でおこなう。 「柔道整復師施設指導要領」に基づき講義する。 1. 上肢における骨折の概要説明 2. 問題演習		
成績評価	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業への出席が3分の2以上を満たした者についてのみ試験等を実施する。 ・ 期末試験は授業時間内（原則として授業の最終日）に実施する。 ・ 再試験は授業時間外に実施する。 ・ 必要に応じて授業時間内、あるいは授業時間外に中間試験を実施することがある。 ・ 成績評価にあたっては、①試験等の成績、②出席状況、③授業の受講態度等を総合的に勘案した結果を基に判定する。 ・ 成績は以下の5段階で評価し、「可」以上を合格とする。 「秀」：90～100点 「優」：80～89点 「良」：70～79点 「可」：60～69点 「不可」：59点以下 		

教科書	柔道整復学（理論編）	著者名	（社）全国柔道整復学校協会
		出版社名	南江堂
参考書	柔道整復学（実技編）	著者名	（社）全国柔道整復学校協会
		出版社名	南江堂

柔道整復学科・昼間1部・2年（臨床柔整学Ⅳ）

回	講義内容	備考
1	ガイダンス・上肢の機能解剖・上肢の神経障害 1	
2	上肢の神経障害 2	
3	鎖骨周辺の機能解剖・鎖骨骨折	
4	肩甲骨周辺の機能解剖・肩甲骨骨折	
5	上腕骨近位端部骨折 1（骨頭部・解剖頸）	
6	上腕骨近位端部骨折 2（外科頸骨折 1）	
7	上腕骨近位端部骨折 3（外科頸骨折 2）	
8	上腕骨近位端部骨折 3（結節部・骨端線離開）	
9	上腕骨骨幹部骨折 1	
10	上腕骨遠位端部骨折・顆上骨折 1	
11	上腕骨顆上骨折 2	
12	コンパートメント症候群・フォルクマン(Volkman)拘縮	
13	上腕骨外顆骨折	
14	上腕骨内側上顆骨折	
15	中間試験	1～14の範囲
16	橈骨近位端部骨折	
17	橈骨骨幹部骨折・ガレアジ骨折	
18	尺骨骨幹部骨折・モンテギア骨折	
19	橈尺両骨骨幹部骨折	
20	橈骨遠位端骨折・コーレス骨折 1	
21	コーレス骨折 2	
22	橈骨遠位端部骨折・スミス(Smith)骨折他	
23	手根骨の骨折 1	
24	手根骨の骨折 2	
25	中手骨骨折 1	
26	中手骨骨折 2	
27	指骨骨折 1	
28	指骨骨折 2	
29	期末試験	1～28の全範囲
30	期末試験解説	

柔道整復学科・昼間1部・2年（臨床柔整学Ⅴ）

科目名	臨床柔整学Ⅴ	時間・単位	60時間・2単位・30コマ
担当教員	工藤 久美子		
教員の実務経験	柔道整復師として接骨院等で長年勤務した後、専任教員として従事する。		
教育目標	柔道整復学および柔道整復術を学ぶことは、柔道整復師を目指すものにとり欠かすことのできない分野である。基礎柔道整復学をもとに、柔道整復師が扱う外傷を実技を通して学び、柔道整復術の意義、社会的役割を認識し、医療人として患者からの信頼と尊敬を得るような人間性の向上を図ると同時に、高度の医学的知識の修得が必須である。そのため、実技を通してさらに実践的な柔道整復学の正しい理解を促すため、教科書を中心として講義を進めていく方針である。		
授業内容	接骨院勤務時の経験を活かしたかたちで以下の内容についておこなう。 「柔道整復師施設指導要領」に基づき講義する。 1. 上肢における脱臼および軟部組織損傷の概要説明 2. 問題演習		
成績評価	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業への出席が3分の2以上を満たした者についてのみ試験等を実施する。 ・ 期末試験は授業時間内（原則として授業の最終日）に実施する。 ・ 再試験は授業時間外に実施する。 ・ 必要に応じて授業時間内、あるいは授業時間外に中間試験を実施することがある。 ・ 成績評価にあたっては、①試験等の成績、②出席状況、③授業の受講態度等を総合的に勘案した結果を基に判定する。 ・ 成績は以下の5段階で評価し、「可」以上を合格とする。 「秀」：90～100点 「優」：80～89点 「良」：70～79点 「可」：60～69点 「不可」：59点以下 		

教科書	柔道整復学（理論編）	著者名	（社）全国柔道整復学校協会
		出版社名	南江堂
参考書	柔道整復学（実技編）	著者名	（社）全国柔道整復学校協会
		出版社名	南江堂

柔道整復学科・昼間1部・2年（臨床柔整学Ⅴ）

回	講義内容	備考
1	ガイダンス・肩周辺の機能解剖	必要に応じて試験の回数日程を変更
2	胸鎖関節脱臼	
3	肩鎖関節脱臼	
4	上腕骨外科頸骨折：復習	
5	肩関節脱臼 1	
6	肩関節脱臼 2	
7	上腕骨顆上骨折：復習 1	
8	上腕骨顆上骨折：復習 2	
9	肘関節脱臼 1	
10	肘関節脱臼 2	
11	手関節部の脱臼 1	
12	手指部の脱臼 1	
13	手指部の脱臼 2	
14	復習	
15	中間試験（1～14の範囲）	
16	肩の軟部組織損傷 1 腱板損傷	
17	肩の軟部組織損傷 2 上腕二頭筋腱損傷	
18	肩の軟部組織損傷 3 肩スポーツ障害1	
19	肩の軟部組織損傷 3 肩スポーツ障害2	
20	肩末梢神経障害	
21	肘側副靭帯損傷	
22	前腕コンパートメント症候群	
23	前腕神経障害 1	
24	前腕神経障害 2	
25	手指の軟部組織損傷 1	
26	手指の軟部組織損傷 2	
27	手指の軟部組織損傷 3	
28	復習	
29	期末試験（1～28の全範囲）	
30	解説	

柔道整復学科・昼間1部・2年（基礎柔道整復実技Ⅲ）

科目名	基礎柔道整復実技Ⅲ	時間・単位	45時間・1単位・22.5コマ
担当教員	武藤・塚田		
教員の実務経験	柔道整復師として接骨院等で長年勤務した後、専任教員として従事する。		
教育目標	柔道整復学および柔道整復術を学ぶことは、柔道整復師を目指すものにとり欠かすことのできない分野である。基礎柔道整復学をもとに、柔道整復師が扱う外傷を実技を通して学び、柔道整復術の意義、社会的役割を認識し、医療人として患者からの信頼と尊敬を得るような人間性の向上を図ると同時に、高度の医学的知識の修得が必須である。そのため、実技を通してさらに実践的な柔道整復学の正しい理解を促すため、教科書を中心として講義を進めていく方針である。		
授業内容	柔道整復師としての実務経験を活かしながら、以下の各項目に対し講義をおこなう。 1. 各外傷の原因説明 2. 各外傷の分類説明 3. 各外傷の症状説明 4. 各外傷鑑別診断説明 （問題演習含む）		
成績評価	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業への出席が3分の2以上を満たした者についてのみ試験等を実施する。 ・ 期末試験は授業時間内（原則として授業の最終日）に実施する。 ・ 再試験は授業時間外に実施する。 ・ 必要に応じて授業時間内、あるいは授業時間外に中間試験を実施することがある。 ・ 成績評価にあたっては、①試験等の成績、②出席状況、③授業の受講態度等を総合的に勘案した結果を基に判定する。 ・ 成績は以下の5段階で評価し、「可」以上を合格とする。 「秀」：90～100点 「優」：80～89点 「良」：70～79点 「可」：60～69点 「不可」：59点以下 		

教科書	著者名	
	出版社名	
参考書	著者名	
	出版社名	

柔道整復学科・昼間1部・2年（基礎柔道整復実技Ⅲ）

回	講義内容	備考
1	問題演習	
2	問題演習	
3	問題演習	
4	問題演習	
5	問題演習	
6	問題演習	
7	問題演習	
8	問題演習	
9	問題演習	
10	問題演習	
11	問題演習	
12	問題演習	
13	問題演習	
14	問題演習	
15	問題演習	
16	問題演習	
17	問題演習	
18	問題演習	
19	問題演習	
20	問題演習	
21	問題演習	
22	問題演習	
23	期末試験	

柔道整復学科・昼間1部・2年（基礎柔整実技Ⅳ）

科目名	基礎柔道整復実技Ⅳ	時間・単位	45時間・1単位・22.5コマ
担当教員	塚田 悟司		
教員の実務経験	柔道整復師として接骨院等で長年勤務した後、専任教員として従事する。		
教育目標	柔道整復学および柔道整復術を学ぶことは、柔道整復師を目指すものにとり欠かすことのできない分野である。基礎柔道整復学をもとに、柔道整復師が扱う外傷を実技を通して学び、柔道整復術の意義、社会的役割を認識し、医療人として患者からの信頼と尊敬を得るような人間性の向上を図ると同時に、高度の医学的知識の修得が必須である。そのため、実技を通してさらに実践的な柔道整復学の正しい理解を促すため、教科書を中心として講義を進めていく方針である。		
授業内容	<p>下肢の診察・鑑別、固定、後療法などについて病院や接骨院で経験した知識を活かし以下の内容について講義をすすめる。</p> <p>柔道整復学各論下肢</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 機能解剖 2. 下肢骨折・脱臼・軟部組織損傷の概説 3. 整復法と固定法および後療法 4. 整復・固定・後療の実技・演習 		
成績評価	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業への出席が3分の2以上を満たした者についてのみ試験等を実施する。 ・ 期末試験は授業時間内（原則として授業の最終日）に実施する。 ・ 再試験は授業時間外に実施する。 ・ 必要に応じて授業時間内、あるいは授業時間外に中間試験を実施することがある。 ・ 成績評価にあたっては、①試験等の成績、②出席状況、③授業の受講態度等を総合的に勘案した結果を基に判定する。 ・ 成績は以下の5段階で評価し、「可」以上を合格とする。 「秀」：90～100点 「優」：80～89点 「良」：70～79点 「可」：60～69点 「不可」：59点以下 		

教科書	著者名	
	出版社名	
参考書	著者名	
	出版社名	

柔道整復学科・昼間1部・2年（基礎柔道整復実技Ⅳ）

回	講義内容	備考
1	股関節部の軟部組織損傷	
2	股関節部の軟部組織損傷	
3	股関節部の注意すべき疾患	
4	股関節部の注意すべき疾患	
5	大腿部の軟部組織損傷	
6	大腿部の軟部組織損傷	
7	大腿部の注意すべき疾患	
8	膝関節部の軟部組織損傷	
9	膝関節部の軟部組織損傷	
10	膝関節部の軟部組織損傷	
11	青少年期にみられる疾患	
12	中高年期にみられる疾患	
13	中間試験	
14	下腿部の軟部組織損傷	
15	下腿部の軟部組織損傷	
16	下腿部の注意すべき疾患	
17	下腿部の注意すべき疾患	
18	足関節部の軟部組織損傷	
19	足関節部の軟部組織損傷及び注意する疾患	
20	足根部および足趾部の軟部組織損傷	
21	足根部および足趾部の注意すべき疾患	
22	期末試験	
23	期末解説	

柔道整復学科・昼間1部・2年（応用実技Ⅰ）

科目名	応用実技Ⅰ	時間・単位	45時間・1単位・22.5コマ
担当教員	工藤 久美子		
教員の実務経験	柔道整復師として接骨院等で長年勤務した後、専任教員として従事する。		
教育目標	柔道整復学および柔道整復術を学ぶことは、柔道整復師を目指すものにとり欠かすことのできない分野である。基礎柔道整復学をもとに、柔道整復師が扱う外傷を実技を通して学び、柔道整復術の意義、社会的役割を認識し、医療人として患者からの信頼と尊敬を得るような人間性の向上を図ると同時に、高度の医学的知識の修得が必須である。そのため、実技を通してさらに実践的な柔道整復学の正しい理解を促すため、教科書を中心として講義を進めていく方針である。		
授業内容	柔道整復師としての実務経験をもとに以下について講義を実施する。 1. 機能解剖 2. 上肢骨折・脱臼・軟部組織損傷の概説 3. 整復法と固定法および後療法 4. 整復・固定・後療の実技・演習		
成績評価	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業への出席が3分の2以上を満たした者についてのみ試験等を実施する。 ・ 期末試験は授業時間内（原則として授業の最終日）に実施する。 ・ 再試験は授業時間外に実施する。 ・ 必要に応じて授業時間内、あるいは授業時間外に中間試験を実施することがある。 ・ 成績評価にあたっては、①試験等の成績、②出席状況、③授業の受講態度等を総合的に勘案した結果を基に判定する。 ・ 成績は以下の5段階で評価し、「可」以上を合格とする。 「秀」：90～100点 「優」：80～89点 「良」：70～79点 「可」：60～69点 「不可」：59点以下 		

教科書	柔道整復学・実技編改訂第2版	著者名	(公社)全国柔道整復学校協会
		出版社名	南江堂
参考書		著者名	
		出版社名	

柔道整復学科・昼間1部・2年（応用実技Ⅰ）

回	講義内容	備考
1	ガイダンス（全身状態・合併症）・固定材料作成	
2	鎖骨骨折：診察と検査	
3	上腕骨外科頸骨折：診察と検査	
4	コーレス(Colles)骨折：診察と検査	
5	肩鎖関節上方脱臼：診察と検査	
6	肩関節前方脱臼：診察と検査	
7	肘関節脱臼：診察と検査	
8	復習	
9	中間試験	
10	中間試験	
11	鎖骨骨折の固定	
12	上腕骨骨幹部骨折の固定	
13	コーレス(Colles)骨折の固定	
14	肩鎖関節上方脱臼の固定	
15	肩関節前方脱臼の固定	
16	肘関節後方脱臼の固定	
17	第5中手骨頸部骨折の固定・第2指PIP関節背側脱臼の固定	
18	復習	
19	期末試験	
20	期末試験	
21	統合柔道整復実技演習	
22	統合柔道整復実技演習	
23	統合柔道整復実技演習	

柔道整復学科・昼間1部・2年（応用実技Ⅱ）

科目名	応用実技Ⅱ	時間・単位	45時間・1単位・22.5コマ
担当教員	小倉 秀樹		
教員の実務経験	柔道整復師として接骨院等で長年勤務した後、専任教員として従事する。		
教育目標	柔道整復学および柔道整復術を学ぶことは、柔道整復師を目指すものにとり欠かすことのできない分野である。基礎柔道整復学をもとに、柔道整復師が扱う外傷を実技を通して学び、柔道整復術の意義、社会的役割を認識し、医療人として患者からの信頼と尊敬を得るような人間性の向上を図ると同時に、高度の医学的知識の修得が必須である。そのため、実技を通してさらに実践的な柔道整復学の正しい理解を促すため、教科書を中心として講義を進めていく方針である。		
授業内容	<p>柔道整復師としての実務経験を活かし以下について講義をおこなう。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 機能解剖 2. 下肢骨折・脱臼・軟部組織損傷の概説 3. 整復法と固定法および後療法 4. 整復・固定・後療の実技・演習 		
成績評価	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業への出席が3分の2以上を満たした者についてのみ試験等を実施する。 ・ 期末試験は授業時間内（原則として授業の最終日）に実施する。 ・ 再試験は授業時間外に実施する。 ・ 必要に応じて授業時間内、あるいは授業時間外に中間試験を実施することがある。 ・ 成績評価にあたっては、①試験等の成績、②出席状況、③授業の受講態度等を総合的に勘案した結果を基に判定する。 ・ 成績は以下の5段階で評価し、「可」以上を合格とする。 「秀」：90～100点 「優」：80～89点 「良」：70～79点 「可」：60～69点 「不可」：59点以下 		

教科書	柔道整復学・実技編改訂第2版	著者名	(公社)全国柔道整復学校協会
		出版社名	南江堂
参考書		著者名	
		出版社名	

柔道整復学科・昼間1部・2年（応用実技Ⅱ）

回	講義内容	備考
1	ガイダンス・固定材料作成	
2	全身状態・合併症・腱板損傷診察・検査	
3	上腕二頭筋損傷診察・検査	
4	ハムストリング肉離れ診察・検査	
5	大腿四頭筋打撲診察・検査	
6	膝関節側副靭帯診察・検査	
7	膝前十字靭帯診察・検査	
8	膝半月板損傷診察・検査	
9	総練習	
10	試験	
11	試験	
12	下腿三頭筋肉離れ診察・検査	
13	膝関節固定（Xサポートテーピング）	
14	下腿骨骨幹部骨折固定・アキレス腱断裂固定	
15	足関節外側靭帯損傷診察・検査	
16	足関節外側靭帯損傷固定	
17	足関節テーピング（バスケットウィーブ・ヒールロック）	
18	総練習	
19	試験	
20	試験	
21	統合柔道整復実技演習	
22	統合柔道整復実技演習	
23	統合柔道整復実技演習	

柔道整復学科・昼間1部・2年（画像評価実技Ⅰ）

科目名	画像評価実技Ⅰ	時間・単位	45時間・1単位・22.5コマ
担当教員	塚田 悟司		
教員の実務経験	柔道整復師として接骨院等で長年勤務した後、専任教員として従事する。		
教育目標	柔道整復師として現場で活躍できるようにさまざま外傷に対応できるよう、基礎的部分の再確認を含め、実践的な対応能力の獲得を目標とする。		
授業内容	担当教員がそれぞれの現場経験を活かし、実践的な治療技術をみにつける。		
成績評価	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業への出席が3分の2以上を満たした者についてのみ試験等を実施する。 ・ 期末試験は授業時間内（原則として授業の最終日）に実施する。 ・ 再試験は授業時間外に実施する。 ・ 必要に応じて授業時間内、あるいは授業時間外に中間試験を実施することがある。 ・ 成績評価にあたっては、①試験等の成績、②出席状況、③授業の受講態度等を総合的に勘案した結果を基に判定する。 ・ 成績は以下の5段階で評価し、「可」以上を合格とする。 「秀」：90～100点 「優」：80～89点 「良」：70～79点 「可」：60～69点 「不可」：59点以下 		

教科書	柔道整復学（理論編）	著者名	
		出版社名	南江堂
参考書	柔道整復学（実技編）	著者名	
		出版社名	南江堂

柔道整復学科・昼間1部・2年（画像評価実技Ⅰ）

回	講義内容	備考
1	医用画像について	画像診断について含む
2	医用画像について	
3	医用画像について	
4	医用画像について	
5	肩関節について	
6	肩関節について	
7	肘関節について	
8	肘関節について	
9	手関節について	
10	手関節について	
11	股関節について	
12	股関節について	
13	膝関節について	
14	膝関節について	
15	足関節について	
16	足関節について	
17	大腿部について	
18	大腿部について	
19	下腿部について	
20	下腿部について	
21	総復習	
22	総復習	
23	期末解説	

柔道整復学科・昼間1部・2年（総合実技Ⅰ）

科目名	総合実技Ⅰ	時間・単位	45時間・1単位・22.5コマ
担当教員	小倉 秀樹		
教員の実務経験	柔道整復師として病院、接骨院等で長年勤務した後、専任教員として従事する。		
教育目標	柔道整復を取り巻く環境は大きく様変わりし、柔道整復師に求められる知識・技術も変化している。柔道整復術の意義、社会的役割を認識し、医療人として患者からの信頼と尊敬を得るような人間性の向上を図るために、高度の医学的知識の修得が必須である。また、実技を通してさらに実践的な柔道整復術の正しい理解を促すため講義を進めていく方針である。		
授業内容	<p>柔道整復師はプライマリーケアの一翼を担う存在であるために、初診における診断技術に関する項目と、柔道整復術の技術保存の観点から、次の内容で授業を行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 損傷の診察に必要な知識、技術 2. 基礎的解剖生理 3. 柔道実技 <p>これらの内容を、担当教員の臨床経験を活かし、実際の業務に即した、実践的なものを、できうる限り教授する。</p>		
成績評価	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業への出席が3分の2以上を満たした者についてのみ試験等を実施する。 ・ 期末試験は授業時間内（原則として授業の最終日）に実施する。 ・ 再試験は授業時間外に実施する。 ・ 必要に応じて授業時間内、あるいは授業時間外に中間試験を実施することがある。 ・ 成績評価にあたっては、①試験等の成績、②出席状況、③授業の受講態度等を総合的に勘案した結果を基に判定する。 ・ 成績は以下の5段階で評価し、「可」以上を合格とする。 「秀」：90～100点 「優」：80～89点 「良」：70～79点 「可」：60～69点 「不可」：59点以下 		

教科書	柔道整復学・理論編柔道整復学・実技編生理学 一般臨床医学	著者名	全国柔道整復学校協会監修
		出版社名	南江堂 医歯薬出版
参考書		著者名	
		出版社名	

柔道整復学科・昼間1部・2年（総合実技Ⅰ）

回	講義内容	備考
1	診察の意義・診察の進め方	5回の 柔道実技を含む
2	医療面接・視診	
3	打診・聴診・触診	
4	生命徴候	
5	感覚検査	
6	反射検査	
7	代表的な臨床症状	
8	生命徴候の測定・生理機能検査	
9	検体検査・運動機能検査	
10	中間試験	
11	機能解剖	
12	〃	
13	〃	
14	〃	
15	中間試験	
16	生理学の基礎	
17	〃	
18	〃	
19	〃	
20	生理学の応用	
21	〃	
22	〃	
23	期末試験	

柔道整復学科・昼間1部・2年（総合実技Ⅱ）

科目名	総合実技Ⅱ	時間・単位	45時間・1単位・22.5コマ
担当教員	塚田 悟司		
教員の実務経験	柔道整復師として接骨院等で長年勤務した後、専任教員として従事する。		
教育目標	<p>柔道整復術では、古くから運動器すなわち骨、関節、筋、靭帯、神経の損傷に対する施術を行ってきたが、スポーツ人口の増加や高齢者人口の増加に伴って、その施術対象も増加し、柔道整復師として習得すべき技術も高度化してきた。その中での柔道整復学は柔道整復師を目指すものにとっては欠かすことのできないものである。1学年で学んだ基礎柔道整復学を基盤として、柔道整復師が実際に触れる外傷を理論的に学び、柔道整復術の意義、社会的役割を理解し、医療に携わるものとして社会からの信頼と尊敬を得るような人間性の向上と、高度の医学的知識の修得が必須である。そのため業務として扱う外傷を鑑別するうえでも臨床医学および解剖生理学の基礎を理解をするため、教科書を中心に講義を進める方針である。</p>		
授業内容	接骨院での臨床経験を生かした患者を診るうえでの解剖学的知識、診察のチェックポイントを教え、患者を治療するための技術習得を目指す。		
成績評価	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業への出席が3分の2以上を満たした者についてのみ試験等を実施する。 ・ 期末試験は授業時間内（原則として授業の最終日）に実施する。 ・ 再試験は授業時間外に実施する。 ・ 必要に応じて授業時間内、あるいは授業時間外に中間試験を実施することがある。 ・ 成績評価にあたっては、①試験等の成績、②出席状況、③授業の受講態度等を総合的に勘案した結果を基に判定する。 ・ 成績は以下の5段階で評価し、「可」以上を合格とする。 「秀」：90～100点 「優」：80～89点 「良」：70～79点 「可」：60～69点 「不可」：59点以下 		

教科書	プリント配布	著者名	
		出版社名	
参考書		著者名	
		出版社名	

柔道整復学科・昼間1部・2年（総合実技Ⅱ）

回	講義内容	備考
1	脈管	
2	脈管	
3	脈管	
4	脈管・血液の生理学	
5	循環の生理学	
6	循環の生理学	
7	循環の生理学	
8	呼吸器	
9	呼吸の生理学	
10	呼吸の生理学	
11	中間試験	
12	消化器	
13	消化器	
14	消化器・消化と吸収	
15	消化器・消化と吸収	
16	栄養と代謝	
17	栄養と代謝	
18	泌尿器・生殖器	
19	泌尿器・生殖器	
20	尿の生成と排泄	
21	尿の生成と排泄	
22	生殖器の生理学	
22.5	試験	

柔道整復学科・昼間1部・2年（臨床実習Ⅰ）

科目名	臨床実習Ⅰ	時間・単位	45時間・1単位・30コマ
担当教員	阿部 愛鈴紗		
教員の実務経験	柔道整復師として接骨院等で長年勤務した後、専任教員として従事する。		
教育目標	柔道整復師として患者に対する心得と臨床に必要な基本的手技、徒手検査法などを学ぶ。		
授業内容	<p>柔道整復師としての臨床経験を活かした視点で、以下の内容を実践的に指導する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 臨床実習の心得 2. 軟部組織損傷の基礎実習 3. 徒手検査 		
成績評価	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業への出席が3分の2以上を満たした者についてのみ試験等を実施する。 ・ 期末試験は授業時間内（原則として授業の最終日）に実施する。 ・ 再試験は授業時間外に実施する。 ・ 必要に応じて授業時間内、あるいは授業時間外に中間試験を実施することがある。 ・ 成績評価にあたっては、①試験等の成績、②出席状況、③授業の受講態度等を総合的に勘案した結果を基に判定する。 ・ 成績は以下の5段階で評価し、「可」以上を合格とする。 「秀」：90～100点 「優」：80～89点 「良」：70～79点 「可」：60～69点 「不可」：59点以下 		

教科書	著者名	
	出版社名	
参考書	著者名	
	出版社名	

柔道整復学科・昼間1部・2年（臨床実習Ⅰ）

回	講義内容	備考
1	臨床実習の心得	
2	医療面接	
3	徒手検査法に必要な解剖・病態把握（脊柱）	
4	徒手検査法（脊柱）	
5	〃	
6	〃	
7	〃	
8	〃	
9	〃	
10	〃	
11	徒手検査法に必要な解剖・病態把握（上肢）	
12	徒手検査法（上肢）	
13	〃	
14	〃	
15	〃	
16	〃	
17	〃	
18	〃	
19	徒手検査法に必要な解剖・病態把握（下肢）	
20	徒手検査法（下肢）	
21	〃	
22	〃	
23	〃	
24	〃	
25	〃	
26	総練習	
27	〃	
28	〃	
29	期末テスト	
30	〃	

備考 必要に応じ中間試験、小テストを実施する。

柔道整復学科・昼間1部・2年（臨床実習Ⅱ）

科目名	臨床実習Ⅱ	時間・単位	45時間・1単位・30コマ
担当教員	長谷川・八重樫・小倉・工藤・塚田		
教員の実務経験	柔道整復師として接骨院等で長年勤務した後、専任教員として従事する。		
教育目標	新しいカリキュラムでは臨床実習の単位数がふえ、より国民の信頼と期待に応える質の高い柔道整復師を養成するためのものとなっている。ここでは、臨床現場において学び、「医療人としての質を確保」することを目指す。		
授業内容	担当教員が現場経験を活かした視点で、実践的な知識および技術を習得していく。以下の項目について演習する。 1. 医療面接 2. 受付業務 3. 各部位別の評価法 4. 物理療法 5. 運動・手技療法		
成績評価	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業への出席が3分の2以上を満たした者についてのみ試験等を実施する。 ・ 期末試験は授業時間内（原則として授業の最終日）に実施する。 ・ 再試験は授業時間外に実施する。 ・ 必要に応じて授業時間内、あるいは授業時間外に中間試験を実施することがある。 ・ 成績評価にあたっては、①試験等の成績、②出席状況、③授業の受講態度等を総合的に勘案した結果を基に判定する。 ・ 成績は以下の5段階で評価し、「可」以上を合格とする。 「秀」：90～100点 「優」：80～89点 「良」：70～79点 「可」：60～69点 「不可」：59点以下 		

教科書	プリント配布	著者名	
		出版社名	
参考書		著者名	
		出版社名	

柔道整復学科・昼間1部・2年（臨床実習Ⅱ）

回	講義内容	備考
1	医療面接	
2	医療面接	
3	医療面接	
4	医療面接	
5	受付業務	
6	受付業務	
7	受付業務	
8	受付業務	
9	各部位別の評価法	
10	各部位別の評価法	
11	各部位別の評価法	
12	各部位別の評価法	
13	物理療法	
14	物理療法	
15	物理療法	
16	物理療法	
17	運動・手技療法	
18	運動・手技療法	
19	運動・手技療法	
20	運動・手技療法	
21	ケーススタディ	
22	ケーススタディ	
23	ケーススタディ	
24	ケーススタディ	
25	ケーススタディ	
26	ケーススタディ	
27	ケーススタディ	
28	ケーススタディ	
29	ケーススタディ	
30	ケーススタディ	

柔道整復学科・昼間1部・3年（保健医療福祉）

科目名	保健医療福祉	時間・単位	15時間・1単位・7.5コマ
担当教員	八重樫 正		
教員の実務経験	柔道整復師として病院、接骨院等で長年勤務した後、専任教員として従事する。		
教育目標	現代社会においては社会状況の変化に対応して、保健・医療・福祉サービスに関するニーズは、着実に増加するとともに、多様化かつ高度化している。ここでは、柔道整復師として必要な保健・医療・福祉の各社会保障制度の基礎的知識、理解を養うことを主要目標とする。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. 現代社会の変化と社会保障・福祉の動向 2. 社会福祉の分野とサービス 3. 社会福祉実践と医療 		
成績評価	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業への出席が3分の2以上を満たした者についてのみ試験等を実施する。 ・ 期末試験は授業時間内（原則として授業の最終日）に実施する。 ・ 再試験は授業時間外に実施する。 ・ 必要に応じて授業時間内、あるいは授業時間外に中間試験を実施することがある。 ・ 成績評価にあたっては、①試験等の成績、②出席状況、③授業の受講態度等を総合的に勘案した結果を基に判定する。 ・ 成績は以下の5段階で評価し、「可」以上を合格とする。 「秀」：90～100点 「優」：80～89点 「良」：70～79点 「可」：60～69点 「不可」：59点以下 		

教科書	プリント配布	著者名	
		出版社名	
参考書		著者名	
		出版社名	

柔道整復学科・昼間1部・3年（保健医療福祉）

回	講義内容	備考
1	社会保障制度と社会福祉	
2	現代社会の変化と社会保障・社会福祉の動向	
3	医療保障	
4	介護保障	
5	所得保障	
6	高齢者福祉	
7	試験	
8	試験解説	

柔道整復学科・昼間1部・3年（関係法規）

科目名	関係法規	時間・単位	30時間・2単位・15コマ
担当教員	八重樫 正		
教員の実務経験	柔道整復師として接骨院等で長年勤務した後、専任教員として従事する。		
教育目標	柔道整復師として必要な法的知識、その教育を通して柔道整復師としての倫理観の徹底、順法精神の涵養等、医事関係法規を学ぶ。		
授業内容	<p>実際に運営している接骨院の業務で重要と考えられる部分を重視しながら以下の項目について講義を行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 法の意義 2. 柔道整復師法とその関連内容 3. 医療従事者の身分関係法 4. 医療法 5. 薬事法規 6. 衛生関係法規 		
成績評価	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業への出席が3分の2以上を満たした者についてのみ試験等を実施する。 ・ 期末試験は授業時間内（原則として授業の最終日）に実施する。 ・ 再試験は授業時間外に実施する。 ・ 必要に応じて授業時間内、あるいは授業時間外に中間試験を実施することがある。 ・ 成績評価にあたっては、①試験等の成績、②出席状況、③授業の受講態度等を総合的に勘案した結果を基に判定する。 ・ 成績は以下の5段階で評価し、「可」以上を合格とする。 「秀」：90～100点 「優」：80～89点 「良」：70～79点 「可」：60～69点 「不可」：59点以下 		

教科書	関係法規	著者名	前田 和彦 編著
		出版社名	医歯薬出版株式会社
参考書	プリント配布	著者名	
		出版社名	

柔道整復学科・昼間1部・3年（関係法規）

回	講義内容	備考
1	序論	
2	総則	
3	免許	
4	柔道整復師試験	
5	業務	
6	施術所	
7	雑則	
8	罰則	
9	指定登録機関・指定試験機関、附則	
10	医療従事者の資格法	
11	医療法	
12	その他の関係法規	
13	総合復習	
14	期末試験	
15	試験解説	

柔道整復学科・昼間1部・3年（柔道Ⅲ）

科目名	柔道Ⅲ	時間・単位	30時間・1単位・15コマ
担当教員	八重樫 正		
教員の実務経験	柔道整復師として接骨院等で長年勤務した後、専任教員として従事する。		
教育目標	柔道整復師として柔道を正しく理解するため、柔道技術の構造、精神および体育的価値を中心に講義、実習する		
授業内容	長年柔道整復師として柔道に関わってきた経験を生かし、礼法、受身、基本動作、对人的技能、審判法、形などを扱う。授業は初心者でも十分に理解、体得できるような進度を前提にするが、内容によっては習熟度に応じたグループ別学習も取り入れることがある。		
成績評価	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業への出席が3分の2以上を満たした者についてのみ試験等を実施する。 ・ 期末試験は授業時間内（原則として授業の最終日）に実施する。 ・ 再試験は授業時間外に実施する。 ・ 必要に応じて授業時間内、あるいは授業時間外に中間試験を実施することがある。 ・ 成績評価にあたっては、①試験等の成績、②出席状況、③授業の受講態度等を総合的に勘案した結果を基に判定する。 ・ 成績は以下の5段階で評価し、「可」以上を合格とする。 「秀」：90～100点 「優」：80～89点 「良」：70～79点 「可」：60～69点 「不可」：59点以下 		

教科書	プリント配布	著者名	
		出版社名	
参考書		著者名	
		出版社名	

柔道整復学科・昼間1部・3年（柔道Ⅲ）

回	講義内容	備考
1	ガイダンス、柔道小史、礼法、受身	
2	浮落、背負投	
3	肩車、浮腰	
4	払腰、釣込腰	
5	送足払、支釣込足	
6	内股	
7	投の形、打ち込み、投げ込み、乱取り	
8	投の形、打ち込み、投げ込み、乱取り	
9	投の形、打ち込み、投げ込み、乱取り	
10	投の形、打ち込み、投げ込み、乱取り	
11	投の形、打ち込み、投げ込み、乱取り	
12	投の形、打ち込み、投げ込み、乱取り	
13	投の形、打ち込み、投げ込み、乱取り	
14	総復習	
15	期末試験	

柔道整復学科・昼間1部・3年（柔道整復術の適応）

科目名	柔道整復術の適応	時間・単位	30時間・2単位・15コマ
担当教員	大川原 辰也		
教員の實務 経験			
教育目標	適切な柔道整復術を行うため、柔道整復が適応されるか否かの判断能力を養う。		
授業内容	整形外科及び一般臨床医学を基本に柔道整復師の業務範囲か否かについて、鑑別方法および範囲外での対処法等の講義をおこなう。		
成績評価	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業への出席が3分の2以上を満たした者についてのみ試験等を実施する。 ・ 期末試験は授業時間内（原則として授業の最終日）に実施する。 ・ 再試験は授業時間外に実施する。 ・ 必要に応じて授業時間内、あるいは授業時間外に中間試験を実施することがある。 ・ 成績評価にあたっては、①試験等の成績、②出席状況、③授業の受講態度等を総合的に勘案した結果を基に判定する。 ・ 成績は以下の5段階で評価し、「可」以上を合格とする。 「秀」：90～100点 「優」：80～89点 「良」：70～79点 「可」：60～69点 「不可」：59点以下 		

教科書	整形外科 第4版	著者名	
		出版社名	医歯薬出版株式会社
参考書	国家試験過去問題	著者名	
		出版社名	

柔道整復学科・昼間1部・3年（柔道整復術の適応）

回	講義内容	備考
1	診察について	問題演習を主体とする。
2	各疾患における特徴	
3	各外傷・疾患の鑑別	
4		
5		
6		
7		
8		
9	各外傷・疾患の対処法	
10		
11		
12		
13		
14		
15	期末試験	

柔道整復学科・昼間1部・3年（社会保障制度）

科目名	社会保障制度	時間・単位	30時間・2単位・15コマ
担当教員	小倉 秀樹		
教員の実務経験	柔道整復師として病院、接骨院等で長年勤務した後、専任教員として従事する。		
教育目標	平成30年度からの柔道整復学校養成施設カリキュラムでは国民の信頼と期待に応える質の高い柔道整復師を養成するため、「社会保険制度」「職業倫理」についても新設された。 そのために、学生の時から「医療経済」「柔道整復療養費受療委任の取り扱い」などを学び、柔道整復師として「医療人としての質の確保」することを目標とする。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. わが国の社会保障 2. 柔道整復師業務における療養費 3. 職業倫理 これらの内容について、臨床実習の際や、卒業後の業務に対応できる様、講師の臨床経験をもって実践的に様々なケースをあげて学習する。		
成績評価	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業への出席が3分の2以上を満たした者についてのみ試験等を実施する。 ・ 期末試験は授業時間内（原則として授業の最終日）に実施する。 ・ 再試験は授業時間外に実施する。 ・ 必要に応じて授業時間内、あるいは授業時間外に中間試験を実施することがある。 ・ 成績評価にあたっては、①試験等の成績、②出席状況、③授業の受講態度等を総合的に勘案した結果を基に判定する。 ・ 成績は以下の5段階で評価し、「可」以上を合格とする。 「秀」：90～100点 「優」：80～89点 「良」：70～79点 「可」：60～69点 「不可」：59点以下 		

教科書	社会保障制度と 柔道整復師の職業倫理	著者名	(公社)全国柔道整復学校協会
		出版社名	医歯薬出版株式会社
参考書		著者名	
		出版社名	

柔道整復学科・昼間1部・3年（社会保障制度）

回	講義内容	備考
1	社会保障とは	
2	社会保険制度とは	
3	医療保険制度とは	
4	療養費制度の概要	
5	〃	
6	柔道整復療養費	
7	〃	
8	柔道整復療養費の推移	
9	療養費の算定	
10	療養費請求のケーススタディ	
11	医療従事者の職業倫理	
12	柔道整復師に必要な基本的倫理観と患者への対応	
13	柔道整復師の社会的責任と対応	
14	グループ・ディスカッション	
15	期末試験	

柔道整復学科・昼間1部・3年（統合教育科目（I））

科目名	統合教育科目（I）	時間・単位	60時間・4単位・30コマ
担当教員	山本 恒之		
教員の実務 経験			
教育目標	2年生終了時までの間に学習した、解剖学の基礎医学について再度学習し、基礎医学に関する知識を確かなものにするを教育目標とする。		
授業内容	解剖生理学のまとめ なお、授業の途中で、適宜、中間試験を実施することがある		
成績評価	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業への出席が3分の2以上を満たした者についてのみ試験等を実施する。 ・ 期末試験は授業時間内（原則として授業の最終日）に実施する。 ・ 再試験は授業時間外に実施する。 ・ 必要に応じて授業時間内、あるいは授業時間外に中間試験を実施することがある。 ・ 成績評価にあたっては、①試験等の成績、②出席状況、③授業の受講態度等を総合的に勘案した結果を基に判定する。 ・ 成績は以下の5段階で評価し、「可」以上を合格とする。 「秀」：90～100点 「優」：80～89点 「良」：70～79点 「可」：60～69点 「不可」：59点以下 		

教科書		著者名	
		出版社名	
参考書		著者名	
		出版社名	

柔道整復学科・昼間1部・3年（統合教育科目（I））

回	講義内容	備考
1	運動器：総論	
2	運動器：頭部・頸部	
3	運動器：胸部・腹部	
4	運動器：上肢	
5	運動器：下肢	
6	細胞	
7	生殖と発生	
8	組織	
9	循環器：総論	
10	循環器：心臓	
11	循環器：動脈	
12	循環器：静脈	
13	循環器：リンパ管	
14	血液	
15	免疫機構	
16	呼吸器	
17	中間試験	
18	消化器：口腔・食道	
19	消化器：胃・腸管	
20	消化器：肝臓・膵臓	
21	栄養素	
22	泌尿器	
23	内分泌	
24	体温調節・体液調節	
25	神経系の基礎	
26	中枢神経	
27	末梢神経	
28	感覚器：総論・皮膚	
29	感覚器：視覚器・聴覚器	
30	期末試験	

柔道整復学科・昼間1部・3年（臨床柔整学VI）

科目名	臨床柔整学VI	時間・単位	60時間・2単位・30コマ
担当教員	杉浦・片倉		
教員の実務経験	柔道整復師として接骨院等で長年勤務した後、専任教員として従事する。		
教育目標	柔道整復の临床上において、必要不可欠な人体の構造と機能、鑑別が必要な疾患や整形外科的障害及びその病態生理、業務範囲内外の判断に必要な救急知識と関連法規等の知識を柔道整復師国家試験過去問の中から問題を抽出して演習・検討することにより柔道整復師としての知識を習得することを目標とする。		
授業内容	柔道整復師としての実務経験を活かしながら、以下の各項目に対し講義をおこなう。 1. 各外傷の原因説明 2. 各外傷の分類説明 3. 各外傷の症状説明 4. 各外傷鑑別診断説明 (問題演習含む)		
成績評価	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業への出席が3分の2以上を満たした者についてのみ試験等を実施する。 ・ 期末試験は授業時間内（原則として授業の最終日）に実施する。 ・ 再試験は授業時間外に実施する。 ・ 必要に応じて授業時間内、あるいは授業時間外に中間試験を実施することがある。 ・ 成績評価にあたっては、①試験等の成績、②出席状況、③授業の受講態度等を総合的に勘案した結果を基に判定する。 ・ 成績は以下の5段階で評価し、「可」以上を合格とする。 「秀」：90～100点 「優」：80～89点 「良」：70～79点 「可」：60～69点 「不可」：59点以下 		

教科書	著者名	
	出版社名	
参考書	著者名	
	出版社名	

柔道整復学科・昼間1部・3年（臨床柔整学Ⅵ）

回	講義内容	備考
1	整形外科問題演習	
2	整形外科問題演習	
3	整形外科問題演習	
4	整形外科問題演習	
5	整形外科問題演習	
6	整形外科問題演習	
7	整形外科問題演習	
8	リハビリテーション学問題演習	
9	リハビリテーション学問題演習	
10	リハビリテーション学問題演習	
11	リハビリテーション学問題演習	
12	リハビリテーション学問題演習	
13	リハビリテーション学問題演習	
14	リハビリテーション学問題演習	
15	中間試験	
16	専門分野および専門基礎分野の問題演習・解説	
17	専門分野および専門基礎分野の問題演習・解説	
18	専門分野および専門基礎分野の問題演習・解説	
19	専門分野および専門基礎分野の問題演習・解説	
20	専門分野および専門基礎分野の問題演習・解説	
21	専門分野および専門基礎分野の問題演習・解説	
22	専門分野および専門基礎分野の問題演習・解説	
23	専門分野および専門基礎分野の問題演習・解説	
24	専門分野および専門基礎分野の問題演習・解説	
25	専門分野および専門基礎分野の問題演習・解説	
26	専門分野および専門基礎分野の問題演習・解説	
27	専門分野および専門基礎分野の問題演習・解説	
28	専門分野および専門基礎分野の問題演習・解説	
29	専門分野および専門基礎分野の問題演習・解説	
30	期末試験	

柔道整復学科・昼間1部・3年（臨床柔整学Ⅶ）

科目名	臨床柔整学Ⅶ	時間・単位	60時間・2単位・30コマ
担当教員	渡辺 潤		
教員の実務経験	柔道整復師として接骨院等で長年勤務した後、専任教員として従事する。		
教育目標	<p>柔道整復術は、輝かしい伝統を基礎とし、近代医学の発展に貢献してきた。その中での柔道整復学は柔道整復師を目指すものにとっては欠かすことのできないものである。1学年で学んだ基礎柔道整復学を基盤として、柔道整復師が実際に触れる外傷を理論的に学び、柔道整復術の意義、社会的役割を理解し、医療に携わるものとして社会からの信頼と尊敬を得るような人間性の向上と、高度の医学的知識の修得が必須である。そのため業務として扱う外傷についての理論を植付け、柔道整復学の正しい理解を促すため、教科書を中心に講義を進める方針である。</p>		
授業内容	<p>柔道整復師としての実務経験を活かしながら、以下の各項目に対し講義をおこなう。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 各外傷の原因説明 2. 各外傷の分類説明 3. 各外傷の症状説明 4. 各外傷鑑別診断説明（問題演習含む） 		
成績評価	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業への出席が3分の2以上を満たした者についてのみ試験等を実施する。 ・ 期末試験は授業時間内（原則として授業の最終日）に実施する。 ・ 再試験は授業時間外に実施する。 ・ 必要に応じて授業時間内、あるいは授業時間外に中間試験を実施することがある。 ・ 成績評価にあたっては、①試験等の成績、②出席状況、③授業の受講態度等を総合的に勘案した結果を基に判定する。 ・ 成績は以下の5段階で評価し、「可」以上を合格とする。 「秀」：90～100点 「優」：80～89点 「良」：70～79点 「可」：60～69点 「不可」：59点以下 		

教科書	著者名	
	出版社名	
参考書	著者名	
	出版社名	

柔道整復学科・昼間1部・3年（臨床柔整学Ⅶ）

回	講義内容	備考
1～5	柔道整復学に必要な機能解剖	
6～10	上肢の外傷	
11～14	下肢の外傷	
15	中間試験	
16～21	臨床に沿った外傷	
22～28	外傷全般の鑑別・治療	
29	期末試験	
30	試験解説	

柔道整復学科・昼間1部・3年（臨床柔整学Ⅷ）

科目名	臨床柔整学Ⅷ	時間・単位	60時間・2単位・30コマ
担当教員	杉浦 透		
教員の実務経験	柔道整復師として接骨院等で長年勤務した後、専任教員として従事する。		
教育目標	柔道整復の临床上において、必要不可欠な人体の構造と機能、鑑別が必要な疾患や整形外科的障害及びその病態生理、業務範囲内外の判断に必要な救急知識と関連法規等の知識を柔道整復師国家試験過去問の中から問題を抽出して演習・検討することにより柔道整復師としての知識を習得することを目標とする。		
授業内容	柔道整復師としての臨床経験を踏まえて、専門分野および専門基礎分野の問題演習・解説をおこなう。		
成績評価	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業への出席が3分の2以上を満たした者についてのみ試験等を実施する。 ・ 期末試験は授業時間内（原則として授業の最終日）に実施する。 ・ 再試験は授業時間外に実施する。 ・ 必要に応じて授業時間内、あるいは授業時間外に中間試験を実施することがある。 ・ 成績評価にあたっては、①試験等の成績、②出席状況、③授業の受講態度等を総合的に勘案した結果を基に判定する。 ・ 成績は以下の5段階で評価し、「可」以上を合格とする。 「秀」：90～100点 「優」：80～89点 「良」：70～79点 「可」：60～69点 「不可」：59点以下 		

教科書	著者名	
	出版社名	
参考書	著者名	
	出版社名	

柔道整復学科・昼間1部・3年（臨床柔整学Ⅷ）

回	講義内容	備考
1～9	専門分野および専門基礎分野の問題演習・解説	
10	中間試験	
11～19	専門分野および専門基礎分野の問題演習・解説	
20	中間試験	
21～29	専門分野および専門基礎分野の問題演習・解説	
30	期末試験	
備考：		

柔道整復学科・昼間1部・3年（臨床柔整学Ⅸ）

科目名	臨床柔整学区	時間・単位	30時間・1単位・15コマ
担当教員	阿部 愛鈴紗		
教員の実務経験	柔道整復師として病院、接骨院等で長年勤務した後、専任教員として従事する。		
教育目標	平成30年度からの柔道整復学校養成施設カリキュラムでは国民の信頼と期待に応える質の高い柔道整復師を養成するため、「社会保険制度」「職業倫理」についても新設された。 そのために、学生の時から「医療経済」「柔道整復療養費受療委任の取り扱い」などを学び、柔道整復師として「医療人としての質の確保」することを目標とする。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. わが国の社会保障 2. 柔道整復師業務における療養費 3. 職業倫理 4. 国家試験に対応する全教科の復習 これらの内容について、臨床実習の際や、卒業後の業務に対応できる様、講師の臨床経験をもって実践的に様々なケースをあげて学習する。		
成績評価	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業への出席が3分の2以上を満たした者についてのみ試験等を実施する。 ・ 期末試験は授業時間内（原則として授業の最終日）に実施する。 ・ 再試験は授業時間外に実施する。 ・ 必要に応じて授業時間内、あるいは授業時間外に中間試験を実施することがある。 ・ 成績評価にあたっては、①試験等の成績、②出席状況、③授業の受講態度等を総合的に勘案した結果を基に判定する。 ・ 成績は以下の5段階で評価し、「可」以上を合格とする。 「秀」：90～100点 「優」：80～89点 「良」：70～79点 「可」：60～69点 「不可」：59点以下 		

教科書		著者名	
		出版社名	
参考書	社会保障制度と柔道整復の職業倫理	著者名	全国柔道整復学校協会監修
		出版社名	医歯薬出版株式会社

柔道整復学科・昼間1部・3年（臨床柔整学Ⅸ）

回	講義内容	備考
1		
2		
3		
4		
5		
6		
7		
8	全教科総合復習（試験含）	
9		
10		
11		
12		
13		
14		
15		

柔道整復学科・昼間1部・3年（応用実技Ⅲ）

科目名	応用実技Ⅲ	時間・単位	45時間・1単位・22.5コマ
担当教員	工藤 久美子		
教員の実務経験	柔道整復師として接骨院等で長年勤務した後、専任教員として従事する。		
教育目標	認定実技審査及び国家試験対策として、「患者安全」という目的に沿った、柔道整復師、もしくは国家試験受験生として必要な実技能力を担保できるよう、国家試験出題基準、認定実技審査要領の項目において、診察及び整復、検査の能力、固定の能力、口述の能力を体得するため、担当教員の臨床経験を活かし実践的に指導する。		
授業内容	柔道整復師としての現場経験を活かした視点で、以下の内容をで実践的に指導する。 1. 各外傷の概説 2. 診察と整復方法 3. 診察と検査方法 4. 固定方法		
成績評価	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業への出席が3分の2以上を満たした者についてのみ試験等を実施する。 ・ 期末試験は授業時間内（原則として授業の最終日）に実施する。 ・ 再試験は授業時間外に実施する。 ・ 必要に応じて授業時間内、あるいは授業時間外に中間試験を実施することがある。 ・ 成績評価にあたっては、①試験等の成績、②出席状況、③授業の受講態度等を総合的に勘案した結果を基に判定する。 ・ 成績は以下の5段階で評価し、「可」以上を合格とする。 「秀」：90～100点 「優」：80～89点 「良」：70～79点 「可」：60～69点 「不可」：59点以下 		

教科書	柔道整復学・実技編改訂第2版	著者名	(公社)全国柔道整復学校協会
		出版社名	南江堂
参考書		著者名	
		出版社名	

柔道整復学科・昼間1部・3年（応用実技Ⅲ）

回	講義内容	備考
1	ガイダンス・固定材料作成鎖骨骨折：整復	
2	上腕骨外科頸（外転型骨折）：整復	
3	コーレス(Colles)：整復	
4	肩鎖関節上方脱臼：整復	
5	肩関節前方脱臼：整復	
6	肘関節後方脱臼：整復	
7	肘内障：整復	
8	鎖骨骨折：固定	
9	復習	
10	中間試験	
11	中間試験	
12	上腕骨外科頸（外転型骨折）：固定	
13	コーレス(Colles)：固定	
14	第5中手骨頸部骨折・第2PIP関節背側脱臼：固定	
15	肋骨骨折・肩鎖関節上方脱臼：固定	
16	肩関節前方脱臼：固定	
17	肘関節後方脱臼：固定	
18	復習	
19	期末試験	
20	期末試験	
21	統合柔道整復実技演習	
22	統合柔道整復実技演習	
22.5	統合柔道整復実技演習	

柔道整復学科・昼間1部・3年（応用実技Ⅳ）

科目名	応用実技Ⅳ	時間・単位	45時間・1単位・22.5コマ
担当教員	小倉 秀樹		
教員の実務経験	柔道整復師として接骨院等で長年勤務した後、専任教員として従事する。		
教育目標	柔道整復学理論や柔道整復学実技をもとに、柔道整復師が実際に業とする上肢外傷を想定し、機能解剖、触診法および鑑別診断など柔道整復師として必要な知識を習得する。 国家試験、認定実技試験の内容に対応できる運動器外傷の総論、各論の知識の習得に努める。		
授業内容	柔道整復師としての現場経験を活かした視点で、以下の内容を実施する。 1. 各外傷の概説 2. 整復方法 3. 固定方法 4. 国家試験に対応した運動器外傷の総論、各論		
成績評価	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業への出席が3分の2以上を満たした者についてのみ試験等を実施する。 ・ 期末試験は授業時間内（原則として授業の最終日）に実施する。 ・ 再試験は授業時間外に実施する。 ・ 必要に応じて授業時間内、あるいは授業時間外に中間試験を実施することがある。 ・ 成績評価にあたっては、①試験等の成績、②出席状況、③授業の受講態度等を総合的に勘案した結果を基に判定する。 ・ 成績は以下の5段階で評価し、「可」以上を合格とする。 「秀」：90～100点 「優」：80～89点 「良」：70～79点 「可」：60～69点 「不可」：59点以下 		

教科書	柔道整復学・実技編改訂第2版	著者名	(公社)全国柔道整復学校協会
		出版社名	南江堂
参考書		著者名	
		出版社名	

柔道整復学科・昼間1部・3年（応用実技Ⅳ）

回	講義内容	備考
1	腱板損傷：検査法	
2	上腕二頭筋長頭腱炎：検査法	
3	大腿四頭筋打撲	
4	ハムストリング肉離れ	
5	膝関節側副靭帯	
6	膝前十字靭帯	
7	膝半月板損傷	
8	下腿三頭筋肉離れ	
9	復習	
10	中間試験	
11	中間試験	
12	下腿骨骨幹部骨折固定	
13	下腿三頭筋肉離れ	
14	アキレス腱断裂固定	
15	足関節外側靭帯損傷	
16	足関節外側靭帯損傷固定	
17	足関節テーピング(バスケット・ヒールロック)	
18	復習	
19	試験	
20	試験	
21	統合柔道整復実技演習	
22	統合柔道整復実技演習	
22.5	統合柔道整復実技演習	

柔道整復学科・昼間1部・3年（画像評価実技Ⅱ）

科目名	画像評価実技Ⅱ	時間・単位	45時間・1単位・22.5コマ
担当教員	小倉 秀樹		
教員の実務経験	柔道整復師として接骨院等で長年勤務した後、専任教員として従事する。		
教育目標	柔道整復の临床上において、必要不可欠な人体の構造と機能、鑑別が必要な疾患や整形外科的障害及びその病態生理、業務範囲内外の判断に必要な救急知識と関連法規等の知識を柔道整復師国家試験過去問の中から問題を抽出して演習・検討することにより柔道整復師としての知識を習得することを目標とする。		
授業内容	担当教員が現場経験を活かした視点で、実践的な知識および技術を習得していく。以下		
成績評価	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業への出席が3分の2以上を満たした者についてのみ試験等を実施する。 ・ 期末試験は授業時間内（原則として授業の最終日）に実施する。 ・ 再試験は授業時間外に実施する。 ・ 必要に応じて授業時間内、あるいは授業時間外に中間試験を実施することがある。 ・ 成績評価にあたっては、①試験等の成績、②出席状況、③授業の受講態度等を総合的に勘案した結果を基に判定する。 ・ 成績は以下の5段階で評価し、「可」以上を合格とする。 「秀」：90～100点 「優」：80～89点 「良」：70～79点 「可」：60～69点 「不可」：59点以下 		

教科書	柔道整復学・理論編改訂第7版 柔道整復学・実技編改訂第2版	著者名	(公社)全国柔道整復学校協会
		出版社名	南江堂
参考書		著者名	
		出版社名	

柔道整復学科・昼間1部・3年（画像評価実技Ⅱ）

回	講義内容	備考
1	骨折の診察及び整復・鎖骨骨折, 上腕骨外科頸外転型骨折	
2	骨折の診察及び整復・Colles骨折	
3	脱臼の診察及び整復・肩鎖関節, 肩関節脱臼, 肘関節脱臼, 肘内障	
4	軟部組織損傷の診察と検査・腱板, 上腕二頭筋損傷	
5	軟部組織損傷の診察と検査・大腿部の損傷, 膝関節靭帯, 半月損傷	
6	軟部組織損傷の診察と検査・下腿部, 足関節損傷	
7	骨折の固定・鎖骨骨折, 上腕骨骨幹部骨折	
8	骨折の固定・Colles骨折, 第5中手骨頸部骨折	
9	骨折の固定・下腿骨骨幹部骨折, 肋骨骨折	
10	脱臼の固定・肩鎖関節脱臼, 肩関節脱臼	
11	脱臼の固定・肘関節脱臼, 第2PIP関節脱臼	
12	軟部組織損傷の固定・アキレス腱断裂	
13	軟部組織損傷の固定・足関節外側靭帯損傷（局所副子, テープ固定）	
14	軟部組織損傷の固定・膝関節内側側副靭帯損傷	
15	中間試験	
16	柔道理論	
17	柔道理論	
18	柔道実技	
19	柔道実技	
20	柔道実技	
21	柔道実技	
22	柔道実技	
23	期末試験	

柔道整復学科・昼間1部・3年（総合実技Ⅲ）

科目名	総合実技Ⅲ	時間・単位	1単位・45時間・22.5コマ
担当教員	松田 心一		
教員の実務経験	柔道整復師として病院、接骨院等で長年勤務した後、専任教員として従事する。		
教育目標	柔道整復を取り巻く環境は大きく様変わりし、柔道整復師に求められる知識・技術も変化している。柔道整復術の意義、社会的役割を認識し、医療人として患者からの信頼と尊敬を得るような人間性の向上を図るために、高度の医学的知識の修得が必須である。また、実技を通してさらに実践的な柔道整復術の正しい理解を促すため講義を進めていく方針である。		
授業内容	認定実技審査及び国家試験対策として、「患者安全」という目的に沿った、柔道整復師、もしくは国家試験受験生として必要な実技能力を担保できるよう、全国柔道整復学校協会監修 柔道整復学・実技編を教科書とし、国家試験出題基準、認定実技審査要領の項目において、診察及び整復、検査の能力、固定の能力、口述の能力を体得するため、担当教員の臨床経験を活かし実践的に指導する。		
成績評価	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業への出席が3分の2以上を満たした者についてのみ試験等を実施する。 ・ 期末試験は授業時間内（原則として授業の最終日）に実施する。 ・ 再試験は授業時間外に実施する。 ・ 必要に応じて授業時間内、あるいは授業時間外に中間試験を実施することがある。 ・ 成績評価にあたっては、①試験等の成績、②出席状況、③授業の受講態度等を総合的に勘案した結果を基に判定する。 ・ 成績は以下の5段階で評価し、「可」以上を合格とする。 「秀」：90～100点 「優」：80～89点 「良」：70～79点 「可」：60～69点 「不可」：59点以下 		

教科書	柔道整復学・実技編	著者名	全国柔道整復学校協会監修
		出版社名	南江堂
参考書		著者名	
		出版社名	

柔道整復学科・昼間1部・3年（総合実技Ⅲ）

回	講義内容	備考
1	臨床医学問題演習・解説	
2		
3		
4		
5		
6		
7		
8		
9	復習問題演習	
10	復習問題演習・解説	
11	中間試験	
12	外科学問題演習・解説	
13		
14		
15		
16		
17		
18		
19		
20	総合復習問題演習	
21	総合復習問題演習・解説	
22	期末試験	
23	期末試験解説	

柔道整復学科・昼間1部・3年（臨床実習Ⅲ）

科目名	臨床実習Ⅲ	時間・単位	45時間・1単位・30コマ
担当教員	渡辺・片倉・塚田		
教員の実務経験	柔道整復師として接骨院等で長年勤務した後、専任教員として従事する。		
教育目標	柔道整復師として現場で活躍できるようにさまざま外傷に対応できるよう、基礎的部分の再確認を含め、実践的な対応能力の獲得を目標とする。		
授業内容	担当教員がそれぞれの現場経験を活かし、実践的な治療技術をみにつける。		
成績評価	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業への出席が3分の2以上を満たした者についてのみ試験等を実施する。 ・ 期末試験は授業時間内（原則として授業の最終日）に実施する。 ・ 再試験は授業時間外に実施する。 ・ 必要に応じて授業時間内、あるいは授業時間外に中間試験を実施することがある。 ・ 成績評価にあたっては、①試験等の成績、②出席状況、③授業の受講態度等を総合的に勘案した結果を基に判定する。 ・ 成績は以下の5段階で評価し、「可」以上を合格とする。 「秀」：90～100点 「優」：80～89点 「良」：70～79点 「可」：60～69点 「不可」：59点以下 		

教科書	著者名	
	出版社名	
参考書	著者名	
	出版社名	

柔道整復学科・昼間1部・3年（臨床実習Ⅲ）

回	講義内容	備考
1	臨床の心構え	
2	臨床の心構え	
3	軟部組織損傷の対応	
4	軟部組織損傷の対応	
5	軟部組織損傷の鑑別	
6	軟部組織損傷の鑑別	
7	軟部組織損傷の治療法	
8	軟部組織損傷の治療法	
9	軟部組織損傷の後療法	
10	軟部組織損傷の後療法	
11	脱臼に対する対応	
12	脱臼に対する対応	
13	脱臼の鑑別	
14	脱臼の鑑別	
15	脱臼の治療法	
16	脱臼の治療法	
17	脱臼の後療法	
18	脱臼の後療法	
19	骨折の対応	
20	骨折の対応	
21	骨折の鑑別	
22	骨折の鑑別	
23	骨折の治療法	
24	骨折の治療法	
25	骨折の後療法	
26	骨折の後療法	
27	各外傷に対して	
28	各外傷に対して	
29	期末試験	
30	期末試験	

柔道整復学科・昼間1部・3年（臨床実習Ⅳ）

科目名	臨床実習Ⅳ	時間・単位	45時間・1単位・30コマ
担当教員	長谷川・八重樫・松田・塚田・武藤		
教員の実務経験	柔道整復師として接骨院等で長年勤務した後、専任教員として従事する。		
教育目標	柔道整復師が日常業務を行う上で、医科との連携、鑑別・評価、整復法を習得するだけではなく、様々な疾患に対する対応力を養うことが必要である。講義は、座学や実技を主体とし、学生間で相互に高め合えるようにより臨床に即した講義とする方針である。		
授業内容	担当教員が現場経験を活かした視点で、実践的な知識および技術を習得していく。以下の項目について演習する。 1. 医療面接 2. 医家との連携 3. 各部位別の評価法 4. 物理療法 5. 運動・手技療法		
成績評価	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業への出席が3分の2以上を満たした者についてのみ試験等を実施する。 ・ 期末試験は授業時間内（原則として授業の最終日）に実施する。 ・ 再試験は授業時間外に実施する。 ・ 必要に応じて授業時間内、あるいは授業時間外に中間試験を実施することがある。 ・ 成績評価にあたっては、①試験等の成績、②出席状況、③授業の受講態度等を総合的に勘案した結果を基に判定する。 ・ 成績は以下の5段階で評価し、「可」以上を合格とする。 「秀」：90～100点 「優」：80～89点 「良」：70～79点 「可」：60～69点 「不可」：59点以下 		

教科書	著者名	
	出版社名	
参考書	著者名	
	出版社名	

柔道整復学科・昼間1部・3年（臨床実習Ⅳ）

回	講義内容	備考
1	医療面接	
2	医療面接	
3	医療面接	
4	医療面接	
5	医家との連携	
6	医家との連携	
7	医家との連携	
8	医家との連携	
9	各部位の評価法	
10	各部位の評価法	
11	各部位の評価法	
12	各部位の評価法	
13	物理療法	
14	物理療法	
15	物理療法	
16	物理療法	
17	運動・手技療法	
18	運動・手技療法	
19	運動・手技療法	
20	運動・手技療法	
21	ケーススタディ	
22	ケーススタディ	
23	ケーススタディ	
24	ケーススタディ	
25	ケーススタディ	
26	ケーススタディ	
27	ケーススタディ	
28	ケーススタディ	
29	ケーススタディ	
30	ケーススタディ	

柔道整復学科・昼間1部・3年（統合教育科目（Ⅱ））

科目名	統合教育科目（Ⅱ）	時間・単位	90時間・6単位・45コマ
担当教員	杉浦・塚田・武藤		
教員の実務経験	柔道整復師として接骨院等で長年勤務した後、専任教員として従事する。		
教育目標	柔道整復の臨床上において、必要不可欠な人体の構造と機能、鑑別が必要な疾患や整形外科的障害及びその病態生理、業務範囲内外の判断に必要な救急知識と関連法規等の知識を柔道整復師国家試験過去問の中から問題を抽出して演習・検討することにより柔道整復師としての知識を習得するし、国家試験に合格することのできる総合的学力を身につけることを目標とする。		
授業内容	各教員がそれぞれ培った現場経験を活かしながら、解剖学・生理学・病理学・運動学・関係法規・一般臨床医学・リハビリテーション医学・整形外科学・外科学概論・柔道整復学等について、担当の教員が講義を行います。 1. 各分野の問題演習 2. 各分野の解説		
成績評価	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業への出席が3分の2以上を満たした者についてのみ試験等を実施する。 ・ 期末試験は授業時間内（原則として授業の最終日）に実施する。 ・ 再試験は授業時間外に実施する。 ・ 必要に応じて授業時間内、あるいは授業時間外に中間試験を実施することがある。 ・ 成績評価にあたっては、①試験等の成績、②出席状況、③授業の受講態度等を総合的に勘案した結果を基に判定する。 ・ 成績は以下の5段階で評価し、「可」以上を合格とする。 「秀」：90～100点 「優」：80～89点 「良」：70～79点 「可」：60～69点 「不可」：59点以下 		

教科書	著者名	
	出版社名	
参考書	著者名	
	出版社名	

柔道整復学科・昼間1部・3年（統合教育科目（Ⅱ））

回	講義内容	回	講義内容	
1		24	上肢の外傷 骨折・脱臼・軟部組織損傷	
2		25		
3		26		
4		27		
5		28		
6		29		
7	下肢の外傷 骨折・脱臼・軟部組織損傷	30	中間試験	
8		31		
9		32		
10		33		
11		34		
12		35		
13		36		
14		37		
15	中間試験	38	専門分野および専門基礎分野の問題演習・解説	
16	上肢の外傷 骨折・脱臼・軟部組織損傷	39		
17		40		
18		41		
19		42		
20		43		
21		44		
22		45	期末試験	
23				